
Grand Gate

神谷 有志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Grand Gate

【Nコード】

N1132F

【作者名】

神谷 有志

【あらすじ】

”神の使者”と呼ばれる生物たちが襲来し、世界は戦いの渦に巻きこまれていく。神とは？自分の為すべきこととは？生まれてきた意味とは？それを知り、理解することを寛容しない組織”主義者”による妨害。ラブコメあり？！ロボットあり？！の自己追求パラルファンタジー。アクセス数…10000突破！多謝！！お読みいただき、本当にありがとうございます。今後とも末永く、お付き合い頂きますようお願いします。

第1章：1節 覚醒（open the door）（前書き）

初投稿です。誤字脱字・意味不明なことがあると思いますがご了承ください。読んで頂けると幸いです。

第1章：1節 覚醒(open the door)

1、 覚醒(open the door)

『自らが変われば世界は変わる』

ピッピッ

「……………」

ピッピッピッピッピッ

「……………」

ピッピッピッピッピッピッ

「……………んっ」

ピッピッピッピッピッピッ

「……………うっさいな、誰だよ目覚ましかけた奴は!!」

不機嫌なままの男は、殴り倒すように、デジタル時計を止めた・・・

「あつ、俺か・・・っん、俺なのか?!」

・・・

うーん、どう考えても俺の部屋じゃねーよな。

六畳一間、コンクリート打ちっばなしの壁、床。

蛍光灯が申し訳なさそうに二本。威圧的な扉が一枚。

その他に有る物といえば、今、座っている、ベット。

姿見が一枚。それだけ、、あと床に時計が一個。

「ここはどこ??? 私は誰???」

と呟く男は苦笑していた・・・

記憶喪失??? そんなバカな、、

こんな所に入れられているということは、精神病か何かか、、うーん、よく分からん。ピースの足りないパズルは完成しないって、先生もよく言ってたからなく。先生???

これは、いつの記憶だ・・・

・・・俺の記憶だ、だが思いだせん・・・

そもそも、俺の歳はいくつだ・・・

おもむろに立ち上がり、姿見に近づく、、

「いてっ・・・」時計を踏んだ。見覚えのある時計を。

「うーん、なぜ、ブリーフ一枚なんだ。何故、

ブリーフなんだ。くそっ、いちいち細かいことは

この際気にしてられん。」

鏡を通してみる自分??? に妙な違和感をおぼえる。

体はまるで、プロのスポーツ選手のように鍛えられてはいるが、引き締まりかたが尋常ではないことを悟る。

「もしかして、ボクシング選手??！」

ああそうか、殴られすぎて、記憶が飛んじやった・・・

じゃ、この体の無数の切り傷のあのようなものは何だ？

明らかに、えぐれた酷い傷後もいくつかある。

特に、左の目尻から左の口元あたりまで伸びた傷跡。

「ヤクザ屋さんですか？」

自嘲ぎみに問いかける。自分でいうのもなんだが、そんな悪い人には見えん。

「ここはどこ??? 私はダーレ???」

と、投げ捨てる。

もういいや考えるのは、一応出口はあるみたいだし、出してみるか。

・・・

まあいいか、

それよりも今、何時だ?!!

「くそっ」

時計を投げ飛ばす、ベットに向かって、

鉄製の扉に恐る恐る手を掛け・・・

コッコッ

コッコッ

「……」足音が聞こえる。
ノブから手が離れない。

コッコッ コッコッ

「……」足音が聞こえる。
ノブから手が離れない
明らかに近づいてきている。

コッコッ コッコッ

「……」足音が聞こえる。
ノブから手が離れない
どうするよ、俺??

足音が止まり、ノブが回る、自動的に……

が、扉は開かない。

コンッコンッと扉をノックする音。

びっくりして、手を離す。

コンッコンッと扉をノックする音。

「少尉殿……失礼致します。」

扉が開く。

第1章：1節 覚醒（open the door）（後書き）

次回『運命』…命は運ばれる、無数の選択の結果、選ばれるレールの上を、

自らの意思を超越した終着点に向かって・・・

「ここはドコ？私はだあれ？」 BY 男

最後までお読み頂きありがとうございます。

一つ、一つは短いですが、プロットは出来上がっていますのであるべく早く話しを進めたいと思います。

誤字脱字の指摘、コメントを頂ければなお幸いです。

第1章：2節 運命(Doom) (前書き)

誤字脱字・意味不明な点があると思いますがご了承ください。少々卑猥な表現も出てきます。また、内容が暗いため、気分を害された方は、申し訳ありません。

第1章..2節 運命(Doom)

2、運命(doom)

「少尉殿失礼致します。アイ・ルイス軍曹入ります。」
扉が開く・・・

どうするよ、俺？飛び掛るか？？いや、話せば分かるかも、
それよりも、少尉って俺のことか？？？

考える間もなく扉は開ききっていた。

そこには、自分より頭一つ分低い、髪を一つに束ねた
ブロンドの清楚な女性、いや少女がお堅い軍服に身を包み
立っていた。

「少尉殿、良く眠れましたでしょうか？私の粗末な
行為につき合わせてしまった故に・・・」
ほほを赤らめ、細い銀のメガネのふちを
指先でなぞるアイ。

「……………」
言葉が出ない。

「少尉殿、どうかなさいましたか？やはり、昨晚のことを
気にされているのですか、申し訳ありません。」
細いウエストの後ろに両手をまわす。

「昨晚……何かあったのか」
アイという少女は、俺の恋人なのか？？

アイはさらにほほを赤めうつむきながら言い放った。
「怒るのも無理はないと思います。何せ……初めてだったから仕方ないではありませんの。18まで待てと言いつつ、あなたは、いえ、少尉殿は最前線・グランドゲートに出征されて、無事帰還されば、是が非でも……抱いてほしいと思うのは特別な感情ではないと思いますが。」

「……………」
言葉が出ない。

「十分に、ワタクシの立場はわきまえております。失礼致しました。1000時より医務室にて精密検査がありますのでおこし下さい。」

「……………」
言葉が出ない。理解の範疇を超えている。

最前線

グランドゲート

この子を抱いた?! このブอนด์美女を?
意味がわからんし、からかわれてるのか?

「少尉殿??」

「……ふんっ……」
鼻で笑う、何かがおかしい何かが……おかしすぎる

「少尉殿??」 「メガネのふちを指先でなぞる。

「わはっはっはっはっ」 笑いが止まらない。

「誰がショウイだって？へー何かイ？俺が昨晚、君と一晩過ごしたって？ハッハッハッハッ」

アイの目つきが愛する者を見る目つきから、鋭く刺す、まるで汚い物を見るような目つき変わり、扉までゆっくりと後退し始めた。

「オイ、待てヨ、俺様のアイちゃん…昨日と同じ様にもう一回やろうヨ、オイニゲルナヨ」
俺は何を言ってるんだ？何をしてるんだ？

アイは右手の腕時計に向かって小さく呟く。

「検体O2（オツ）にA-13発症の可能性を認む」
左手は後ろのドアノブに手をかけていた。

「オ…ツ…?! エージュウサン…?!」

何故か俺は飛び掛かっていた。

おいやめろっ、心の中で叫ぶが体は言うことを聞かない。

アイはそれをかわし、きれず、体勢をくずしたが、ドアノブからは手を離してはいなかった。

前傾姿勢になっている俺を蹴り上げる。顔ではなく、腹を・・・「うっ」声がもれる。

バタンっ カシヤッ

扉を閉める音の後、金属音が聞こえる。

吐き気と共にうずくまった俺は、霞む、視界を前方にやると

そこには、濡れた床に銀色に光る眼鏡が落ちていた。

「オエ」

吐いた汚物の上に、再び倒れ込む。

記憶喪失。手足の自由が利かない。最悪だ・・・

いつの間にか、部屋は、煙で満たされ・・・

「うとうう・・・」眠い・・・

最悪だ。最悪として何と言う・・・。

シアワセ???!!!!

そのまま、意識は深い闇に飲み込まれていった。

第1章：2節 運命(Doom) (後書き)

次回『現実』…虚像？実像？この世に顕在化するモノ、現れたモノを認識、把握できた世界。

「私のこと、忘れたら、蹴りだけじゃすまさないわよ」BY アイ

最後までお読み頂きありがとうございます。

一つ、一つは短いですが、プロットは出来上がっていますのであるべく早く話しを進めたいと思います。

誤字脱字の指摘、コメントを頂ければなお幸いです。

第1章：3節 現実(Have a nice day) (前書き)

誤字脱字・意味不明なことがあると思いますがご了承ください。読んで頂けると幸いです。
説明が多いです。

第1章…3節 現実(Have a nice day)

3、現実(have a nice day)

左手首が痛い、

涙が止まらない・・・

左手首が痛い、

涙が止まらない・・・

彼が遠くに行ってしまった

涙が止まらない・・・

霞んだ、威圧的な扉に向きになると、アイは呟いた。

「さよなら、いや、またね、私の愛する人」

ピー

右手の腕時計型通信機が受信する。

《軍曹・O2の報告を求む。管理室まで・・・》

《・・・、以上、復唱は結構・・・》

途切れ途切れの女性の上官の声に

通信の不具合？こんなAAクラスの施設内で、

アイは疑問をいだいたが、一呼吸おいて、

「了解、教授殿」

細く長い廊下を小走りに走りながら、幾つかのロックを解除するため、ID代わりの、腕時計をかざし、管理室に向かう・・・

やはり、少尉殿は“神の使者”との交戦において、

ウイルスに犯されてしまっていたのか・・・

反芻するように、少尉の作戦記録を思い出す。

作戦名“Angel Ark”別名ダブルA、今、作戦において、最大の

目的は、グランドゲート突破と、その掌握にある。神を倒さなければ、人類に明日はない。神とは、人類、人を造りし者達、彼ら、彼女達、いや、私たちのように性別はないのかもしれない。彼らが“ガーデン”と呼ぶこの地球に出現した、する為の門“グランドゲート”、太平洋南部に隆起した島、発表においては、古代遺跡があった場所、それも今よりも高度な、、

管理室が見えてきた、彼、あなたの記憶が出てこない。

少尉殿の記録しか・・・

「失礼、致します。アイ・ルイス軍曹、入ります。」

音もなく、目の前の透明な板はアイの歩行を緩めることなく左へ消え去った。

「任務ご苦労様、アイ」

軍服の上から、白衣を着込み肩を落とした女性がいた。

アイは、少し目線を上にあげ、赤髪の短髪のその女性に目をあわせ、霞む視界の中、

「お姉さま・・・」と呟いた。

「アイ・ルイス軍曹、後ほど精密検査は受けてもらうにして、眼鏡もかけないとね。」

アイは、教授の後ろでコンソールパネルに向かう十数名の研究員に気づき、、、

「ご報告、申し上げます。ユウキ教授殿。

検体O2はA-13を発祥した模様、

記憶の混乱、運動神経系がおかされている可能性が高いです。

私見ですが、使者の新型ウイルスに犯されていると思われます。」

先ほどの本音を隠すように、口早に報告を行うが、

それを一蹴する答えが、ユウキから返ってきた。

「違うわね、ウイルスではないわ。症状の私見は

確かに私とも、一致する。あなたも研究者の卵なんだから、ウイルスでなければ大体予想はつくでしょ？」

“Over Drive”（オーバードライブ）

体内に薬物とナノマシンを投与することにより、

交感神経を切り、人体の限界以上の力を引き出す。

約5分間は、この世の者とは思えない、速さ、力で

相手を駆逐し、腕が吹っ飛ぼうが、足が飛ぼうが

戦い続けることができる。人類の狂気もたらした

産物。必ず、訪れる死へ加速する、人類にとって

個の死を無駄死にしないための兵器。

アイは想う・・・

オーバードライブを使い生還したものは誰も居ない。

作戦ダブルAにおいての生還率は2%にも満たなかった。

ナゼ、あなたは生還できたの？

ナゼ、神は人類を襲うの？

ナゼ、ワタシはここに居るの？

なぜ、

何故、

第1章：3節 現実(Have a nice day) (後書き)

次回『希望』…残されたマレな、少しの望み…・終着点は、絶望?!

「お姉さま・・・」BY アイ

最後までお読み頂きありがとうございます。

一つ、一つは短いですが、プロットは出来上がっていますのであるべく早く話しを進めたいと思います。

誤字脱字の指摘、コメントを頂ければなお幸いです。

第1章：4節 希望(I need you) (前書き)

誤字脱字・意味不明なことがあると思いますがご了承ください。読んで頂けると幸いです。

説明が多いです

第1章：4節 希望(I need you)

4、希望(I need you)

「ちよつと、そのあなた、O2に256番を投与しといてちよ
うだい。」

「了解しました。ユウキ主任。僭越ですがパターンA-13
であれば、666番の方がよいのでは？」

申し訳なさそうに、黒髪のツインテールの女性研究員は答えた。

「いいのよ、これで、いいのよ」

パターンA-13、別名、裏切り者。

“神の使者”から受けた、外傷または何らかの要因により、
ウイルスが人の体内に侵入。脳幹を支配する。結果、人を
襲うようになる。人をコンピューターにたとえ、

クラックされたといわれている。遅効性のウイルスだから
タチが悪い。まあでもその可能性は捨てきれないけど、

今回は、オーバードライブによるもの。だから、666番

、誰が割り当てた数字かわからないけど、明らかに皮肉、

悪魔の数字。早期破棄、安楽死させるための、薬物と

ナノマシンの混合剤。O2には、まだまだ研究、改良の余地は
あるはず、まだ破棄するわけには、いかないわ。

256番、鎮静剤と神経系の再構築のための薬剤が正しいのよ、
正しい、私は正しい・・・“wizard system”を完成
させるためにも・・・

「・・・主任！ユウキ主任！！」

「あつ、何？」

「O2に、256番、投与完了いたしました。」

「ありがとう、データはこちらで確認しとくわ。」

「どうされたんですか、ボウっとして。このところ

休んでらっしゃらなかったんで、お疲れじゃないですか？」

「・・・そうね、疲れているのね。」

近場のコンソールパネルに手をかざし、データを呼び出す。

・
・
・
・
・
・
・

「特に問題はなさそうね。」

あくまでも、O2に関して、データが表示されるのが遅すぎると感じるのは、疲れているせい？

「ユウキ主任、もし、よければ、お休みなられた方が・・・」

ツインテールの研究員は、先の報告から、微動だにせず心配そうな眼差しを向けている。

「わかったわよ。任せてあげる。ただし、いつも言うてるけど、ミスは嫌いだからね。」

「あつ、ありがとうございます。おねえ・・・

ユウキ主任」ツインテールの研究員はペコリと頭を下げた。

「まあ、いいわ。じゃ、1800に私の自室にコールしてくれる。あと、どんな些細なことでも、O2に変化があるときは、コールしなさいよ。」

「了解いたしました。」

「レイコ、頼んだわね。」ユウキは短い赤髪をかき上げると管理室をあとにした。

レイコは、ユウキの去り際、再び、ペコリと頭を下げた。

不敵な笑みとともに・・・

第1章：4節 希望（I need you）（後書き）

次回『変革』…自らの、考え方を変える。自らのアイデンティティの抵抗と共に・・・

変える事が正しいか、どうかは別にして・・・

「正しい、私は正しい、私が正しいのよ、わかった？！」By ユウキ

最後までお読み頂きありがとうございます。

一つ、一つは短いですが、プロットは出来上がっていますのであるべく早く話しを進めたいと思います。

誤字脱字の指摘、コメントを頂ければなお幸いです。

第1章：5節 変革 (A r e s i s t e r) (前書き)

誤字脱字・意味不明なことがあると思いますがご了承ください。読んで頂けると幸いです。

第1章：5節 変革（A resister）

5、変革（A resister）

人工進化研究所、まあ、軍部のやつらは、弾薬庫とか言ってるらしいけど、私たちにとっては・・・

それにしても、あの赤髪、うっとうしいわね。こっちも、この計画に3ヶ月も時間をかけているのだからもっと早く、ワタシのことを信用しなさいよね。

レイコは、コンソールパネルに向かい、O2の推移データに目を向けている。

「レイコ修士殿」眼鏡をかけたアイが声をかけてきた。
びくっ

「どうかしましたか」レイコは、パネルのデータを視界から遮断するかのように立ち上がり、ペコりと頭を下げる。

それに対し簡単な敬礼をした、アイ、

「ユウキ教授殿はどちらにいらっしゃいますか？」

「ユウキ主任なら自室で仮眠されていますが。急な用件ですか。できれば、相当お疲れになられていたようなので、後ほどのほうが良いかと、1800時には起きられますので、伝言があれば伝えておきます。」普段のレイコではありえない、矢継ぎ早の回答。

しまった、自が出てしまった。だけど、今あの赤髪に戻ってこれられてはまずいのよ。

「いえ、急ぎではありません故、後ほど伺います。
お忙しい所、失礼いたしました。」気まずそうに答えた

アイは、管理室を後にした。

じゃ、そろそろ仕上げに取り掛かろうかしら、
レイコは、アイが出て行くのを確認した後、管理室の一角にある制
御室に向かった。

左手の腕時計をかざす、当然、ユウキ主任から“任せる”
という言葉を受けているので、扉は退いた。

“信じる者は救われる”司教様は言っていた。この儀は
大儀でなんでしょ。私がボタンを押せば、数時間後
には、人は新しい局面に立つことができるわ。神にあがらう
方法ではなく、もっと違う人類が生きる道。
私が、為すことは、O2の破壊、ひいてはウィザードの破壊
につながる。そのあとは？O2の破壊によって、何が変わると
いうの？

ダメ、ダメよ、レイコ！！盲信者は救われないわ。

……私は“主義者”なのよ。

レイコは、まるで、ピアノの鍵盤をたたくかのように
Enterキーをたたいた。

「ふー」腹の底から息をはく。

でも、コンピューターウイルスで、O2を破壊できるの？
何が起こるの？？ダメ、ダメよ、レイコ。

“信じる者は救われる”のよ！！

レイコは、おもむろに立ち上がり、管理室の扉を開くと、

そこには、金髪を一つに束ね、銀縁の眼鏡から鋭い眼光を光らせる軍人が立っていた。

レイコは、ペコりと頭を下げた・・・

第1章..5節 変革(A resister) (後書き)

次回『認識』..人は、モノは、他より認められ、識られることにより、存在が確定する。

「早く、私のこと信用しなさいよね!!」BY
レ
イコ

最後までお読み頂きありがとうございます。

一つ、一つは短いですが、プロットは出来上がっていますのでなるべく早く話を進めたいと思います。

誤字脱字の指摘、コメントを頂ければなお幸いです。

申し訳ありません、ラブコメあり、ロボットあり、と書いたのですが、もう少し先になりそうです。末永くお付き合い頂ければ幸いです。

第1章：6節 認識 (Understanding identity) (前)

誤字脱字・意味不明なことがあると思いますがご了承ください。読んで頂けると幸いです。

第1章：6節 認識(Understanding identity)

6、認識(Understanding identity)

『あなたが望んだんでしょ？』

俺は望んでなんかいない・・・

『あなたが望んだ世界でしょ？』

俺は望んでなんかいない・・・

『あなたが望んでいない世界・・・望んでいなければ

何故、あなたはここにいるの？

望んだから、、 アナタハ ココニイル』

そう、俺が望んだ選択の結果、俺はここにいるのか？

・・・

・・・

・・・

いや、認めない！！選んだのは確かに俺かもしれない！！

だが、こんな結果、世界は認めない、ゼツタイに！！！！

『あがくモノ、あがらうモノよ、希望は運命によって

絶望へ変わるだろう・・・オマエが望んでいるのだから』

ピーっピーっ

「……………」

ピーっピーっピーっピーっ

「……………」

ピーっピーっピーっピーっピーっピーっ

「……………んっ」

ピーっピーっピーっピーっピーっピーっ

「……………うっさいな、誰だよ目覚ましかけた奴は！！」

不機嫌なままの男は、殴り倒すように、デジタル時計を

止めた・・・

「あつ、俺か・・・っん、俺なのか??！」

・・・

申し訳なさそうな、蛍光灯を見上げる。

「うっ」気持ちワル・・・

吐き気とともに、腹を蹴られた少女のことを考えていた

・・・

たしか、名前はアイ・・・なんとか軍曹。

俺が抱いたとか、言っただけ。でも、あんな好みの子が彼女だっただけなら最高だよな。

そういえば、俺のことを少尉と呼んでたな、

ということは軍人。鞭で叩かれたりするのかな？◎

いやいや、そうなる俺も軍人になっちゃうじゃないか。

・

少尉って、もしかして、カッコいいかも?!!

・

・

・

記憶がないって、不便だよな。まあ、これから

俺のアイちゃんと、楽しい思い出を作ればいいかあ。

記憶喪失になる前の俺も、こんなに樂觀主義者だったのか
なあ。・・・ “主義者”???

ビービービー

《警報・レベル5が発令されました。非戦闘員ならびに

研究関係者はすみやかに退避してください。繰り返します、

警報・・・》

突如、鳴り響く警告音。

「何だ!! 何が起こったんだ・・・」

男はベットから 飛び起き、威圧的な扉まで、走り寄る。

第1章：6節 認識 (Understanding identity) (後書

次回『正義』…正しい義を尽くす。立場が違えば義はことなる行動を意味する。

自らの全存在をかけて、自らを正当化する。
結果、相手が朽ち果てようとも・・・

「記憶喪失ってすばらしい?!」BY O2

最後までお読み頂きありがとうございます。

一つ、一つは短いですが、プロットは出来上がっていますのであるべく早く話しを進めたいと思います。

誤字脱字の指摘、コメントを頂ければなお幸いです。

申し訳ありません、ラブコメあり、ロボットあり、と書いたのですが、もう少し先になりそうです。末永くお付き合い頂ければ幸いです。

第1章：7節 正義 (In the cause of justice) (前)

誤字脱字・意味不明なことがあると思いますがご了承ください。読んで頂けると幸いです。

第1章：7節 正義 (In the cause of justice)

7、正義 (In the cause of justice)

「今作戦の概要を説明する。心して聞くように。」

第1目標、O2ならびにワイザードシステムの破壊である。

第2目標、人工進化研究所の制圧、データの破棄である。」

マイクに向かい、声高々に命令を下す。我ながら快感だ。

「ガイ指揮官、対象の写真・当研究所の見取り図が届きました。」
その男に耳打ちする。

右手で左耳のマリンブルーの長い髪をかき上げながら、モデルのような女性は報告した。

ガイはマリンブルーの髪的女性に目配せすると、

成人男性の1.5倍はあろうかと思われる大きさの手でマイクをつかみ、叫んだ。

「諸君、今作戦に必要なデータは揃えた、失敗は許されない。
。各員、ゴーグルにて確認後、各部隊長を元に連携をとる様に、
部隊長は逐次、私の所に報告をいれること、失敗は許されない。」
隣で、マリンブルーの女性は、コンソールパネルを叩いていた。

「最後に、データの破棄は、もちろん物理的データ、有機物
ネットワークに記録されているものも含まれる。」

ガイは右手で、マリンブルーの女性の尻を鷲づかみにすると、続けて、

「出来の良い諸君ならもちろんわかるよな?! 残らず確実に破棄せよ。健闘を祈る。」

右手に力がこもる・・・

「うっ」マリンブルーの女性から甘い声がもれる・・・

皆殺しだ・・・想像しただけでイキそうだ・・・
このために、ここまで上ってきた、まだ、まだ、足りない・・・
もっと上に行かなければ・・・俺は、上り詰める・・・
主義者の頂点へ。

ガイはふと我にかえり、

「サキ秘書官、いつも通り、最後の一文は記録に残すなよ。
ネットワーク上もすべて、ミスがあつては許されん。」

さらに、右手に力がこもる。

顔色を変えず、サキは答えた。

「了解しております。ガイ様、そろそろお尻から手を離して
いただけませんか？」

「おっと失礼、セクハラで訴えられても困るからな。」

と笑い、ガイは右手の握力を緩め、今度はサキの尻を
なめ回すかのように、なで始めた。

《アルファ―B分隊配置完了いたしました》

《ベータJ分隊配置完了いたしました》

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

次々に、配置完了の報告が入る・・・

あと、数分で配置が完了する。

「ガイ様、レイコ・ラングラー修道士の件ですが、今だ合流地点に
到着してないそうです。

いかが致しましょうか？」

「計画通りに任務を遂行できない奴はいらん。」

「一応、ウイルスを仕込むことはできたようです。作戦自体に
問題はありません。」

「そうは言ってもこの作戦の中核をなした人物、このまま
にしておくわけにもいかな？サキ」

「了解しております。最重要保護人物として各部隊に
送っておきます」

サキはパネルを操作しデータを送った。

「重要破棄人物 レイコ・ラングラ」

《全部隊配置完了いたしました》

大隊長より報告が上がる。

ガイは、右手でサキの尻をなでるの止め、

「繰り返し言うが、失敗はされない。

各員、目標を制圧せよ！！！」

と叫ぶと同時に右手は大きく弧をえがきサキの尻を引っ叩いた。

パシッー

「うつ、あ」サキの口から甘い吐息のような声が漏れた。

第1章：7節 正義 (In the cause of justice)

(後)

次回『矛盾』…どんなモノでも防ぐ盾あり、どんなモノでも貫く矛あり。

「失敗は許されない」 B Y ガイ

「セクハラは許されない」 B Y サキ

最後までお読み頂きありがとうございます。

一つ、一つは短いですが、プロットは出来上がっていますのであるべく早く話しを進めたいと思います。

誤字脱字の指摘、コメントを頂ければなお幸いです。

申し訳ありません、ラブコメあり、ロボットあり、と書いたのですが、もう少し先になりそうです。末永くお付き合い頂ければ幸いです。

第1章：8節 矛盾(Have a strong will) (前書き)

誤字脱字・意味不明なことがあると思いますがご了承ください。読んで頂けると幸いです。

第1章：8節 矛盾(Have a strong will)

8、矛盾(Have a strong will)

正しいこと、

一つ、世界を救うこと。

一つ、人類を滅ぼさないこと。

一つ、上記2つを成すために人類の英知、科学を用いること。

ユウキは、寝返りをうつ。

体は疲れているのに、頭が冴える。

本当にそろそろ眠らないとマズイわね。

本質から考えると、世界を救うことが第一になるわよね。
要は地球を健全な状態に保つこと。だって、そうでしょ、
人間は何億とある種のひとつに過ぎないのだから。そう
考えると、人間は、地球、他の生物からすれば害でしかない
のよね。科学の発展の名の下に、自然を破壊し、動植物を
食べ散らかし、地球と言う惑星そのものの、ひいてはそこに居る
生物を破壊し、汚してきた。おそらくあと、何百年、いや、
何十年も持たないでしょうね。でも、しかたないじゃない、
自然の摂理、法則“弱肉強食”に基づけば、人類が悪い
わけではない。科学という英知をただ、人と言う種が手に
いれた結果でしかない。

ユウキは、寝返りをうつ。

でも・・・“弱肉強食”の原理・原則に基づけば、“神の使者”

に人類が滅ぼされるのは、あたりまえのこと。あがくだけ無駄。
むしろ、そのほうが、地球にとっては良いこと。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

ダメよ。これじゃ、“主義者”と同じじゃないの。

ビービービー

《警報・レベル5が発令されました。非戦闘員ならびに
研究関係者はすみやかに退避してください。繰り返します、
警報・・・》

突如、鳴り響く警告音。

ユウキは、ベットから飛び起き、腕時計から管理室にコールする。

「誰かいる?!?! 何がどうなってるの?!?!?!」

レベル5になるまでなんで誰も気づかなかったの?!?!?!」

レベル5…敵対するモノ・研究所に悪意を持ったモノの
大量の進入を意味する。

《・・・アイ・・・です・・・武・・・勢力の・・・

進入・・・た・・・稼・・・率・・・18・・・

コン・・・ター・・・スの影・・・中枢・・・は

閉・・・》

「もういいわ!!!! そっちに行くから!!!!!!」

自室から飛び出るユウキ。

ジャミングがかけられてる。AA施設において、外からの
電波中継機の封鎖は出来ない。とすれば、制御室から手引きした

奴がいる！

さっきの声はアイ・・・彼女が!!? いや、それはないはず、でも可能性はゼロではない・・・

通路を走り抜ける、ここのカドを曲がれば、管理室よ。

足首のホルスターから単発式の銃を取り出す。

! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ?

何で隔壁もしまってないのよ。レベル5が発令されれば、すべての隔壁は封鎖され、特に、中枢部に繋がる12連式は真っ先に閉まるはず。・・・・・・どうやら最悪のようね。これじゃ、十数分もたたない内に制圧されるわ。恐らく、このタイミングの侵入者は“主義者”しかいないはずだから。

「ふう〜」体の奥そこから息をはき、管理室まで駆け抜ける。なれない銃を構え、扉を自動式の扉を手動で開く・・・

第1章：8節 矛盾 (Have a strong will) (後書き)

次回『残酷』…酷いモノを残す…

「世の中、キレイ事だけじゃ、何も解決しないのよ」
By ユウキ

最後までお読み頂きありがとうございます。

申し訳ありません。配信が遅れますことをお詫びいたします。

誤字脱字の指摘、コメントを頂ければなお幸いです。

申し訳ありません、ラブコメあり、ロボットあり、と書いたのですが、もう少し先になりそうです。未永くお付き合い頂ければ幸いです。

第1章：9節 残酷（whitewash）（前書き）

誤字脱字・意味不明なことがあると思いますがご了承ください。読んで頂けると幸いです。

第1章：9節 残酷（white wash）

9、残酷（white wash）

「あなた！ここで何してるの？！」

銃口と目が合う。

「あなたこそなんのつもりなの？」

マズイわ、レイコ。どうして、この金髪が戻ってくるの？

ワタシの演技は間違いないはず・・・

・・・

・・・もしかして・・・

「制御室は博士以上の学位もしくは相応の役職を持つ者しか入れない。」

不正に進入する者がいれば排除するように言われてる！

両手を挙げてこっちに出てきなさい！！」

やはり・・・

レイコは口元を緩める・・・

バカな子ね、命令第一、イレギュラーは認めない性格。

扱い易いわ。ワタシがここにすることが問題では

なくて、ワタシがここで何をしたかが問題。

「三秒以内に両手を挙げて出て来なければ容赦しない。」

この状況のままだと、この金髪バカに撃たれられないわね。
一つ、ここで脅えて、ユウコに任されたことを言えばいいの
よ。

これは、嘘じゃないもの・・・

「3・2・1・・・」

「やめて！やめて下さい！！」レイコは震えてるかのように両手を挙げて、制御室から出る。

「ユウコ主任から、言われて、、、制御室の調整を頼まれていたんです、、だから、、どうしてこんなことをするんですか、アイさん、、うううう・・・」

レイコは嗚咽を漏らすような声を出し、涙を絞り出した。

・・・

「それは本当か？嘘ではないのか？？」

落ちた、こんなにも簡単に、堕ちた。

「何故、私が嘘をつく、必要があるんですか？！」

この部屋にいるみんなに聞けばいいじゃないですか？ワタシが、“ユウコ主任に任された”かどうかを？」

もうこれで、確定、バレル要素はほとんどない、もし、聞かれたとしても“任された”事実は周知のこと。

「うっ、すまなかった。どうやら私が勘違いをしてたようだ。てつきり、不正に忍びこみ、何か仕掛けてのかと思った。」

アイは、面目ないと肩を落とし、銃を右脇にしまう。

惜しいわね、答えは合ってるんだけど、過程が間違ってるから、あなたは0点よ。

さして、シメといきますか。

レイコはツンテールを項垂れると、ふとももを閉じ、内股のまま、ペタンと座り込んだ。

「本当に申し訳ない、怖い思いをさせて・・・

言い訳だが、この研究所にスパイが入り込んでいると情報が入っていて、人の出入りがない制御室に、レイコ殿が入っていったと聞いたので。」

アイは左手を差し伸べる・・・

「私がスパイだと・・・思ったの??」

「本当に申し訳ない・・・私も色々あって、正しい判断が取れなかったのだ・・・」

「ありがとう・・・」アイの手をとる・・・

ありがとう・・・

本当におバカさんで・・・

ビービービー

《警報・レベル5が発令されました。非戦闘員ならびに研究関係者はすみやかに退避してください。繰り返します、警報・・・》

突如、鳴り響く警告音。

「誰か、警報をならしたのか?!」アイは、叫ぶ。

先ほどまでの、アイとレイコのやりとりに度肝を抜かされていた研究員たちは、立て続けに起こる、不足の事態をまったく

理解できていなかった。

引き上げられ、立ち上がったレイコは、

「誤報よ。」と言って、管理室を出ようとした。

が、後ろから腕をつかまれてしまった。

「ダメよ!!ここから出ては、恐らく誤報ではないわ。」

バカだけど、恐ろしく感じがいい奴。私が一番嫌いなタイプ、
扱いやすいのは一時だけで、感だけで行動しようと
するから、論理が通じず堂々巡り。

レイコはふと腕時計に目を落とす。

定期連絡を取る時間を過ぎていない!!!

どうして、警報がなるの?突入するにして

も、コンピューターウイルスが発症するにしても、時が早すぎ
る!?!?

「データ参照を受付ません!!アイ軍曹!!!!」

兎にも角にも、原因を探ろうと、各研究員に指示を出す

アイを尻目に、再び出口に近づく。

・・・

ゆっくりと開く扉から、赤髪が現れた。

後ずさるレイコ・・・

まずい、ウイルスが原因だとバレれば、まず間違いなく、

私がスパイだと気づかれる。司教様はウイルスは遅効性のもの
だから、

レイコが逃げる時間はたっぷりと言ってくれた。

誰かがすり替えた?!

第1章：9節 残酷（white wash）（後書き）

次回『狂気』…気が狂う…クルクルと、クルクルと、

「私はバカじゃない。従順なだけ・・・」 B Y アイ

最後までお読み頂きありがとうございます。

申し訳ありません。配信が遅れますことをお詫びいたします。

誤字脱字の指摘、コメントを頂ければなお幸いです。

申し訳ありません、ラブコメあり、ロボットあり、と書いたのですが、もう少し先になりそうです。末永くお付き合い頂ければ幸いです。

第1章：10節 狂気（Innocent）（前書き）

サキ「評価を頂けないでしょうか？宜しく願いします。ほら、ガイ様も頭を下げて」

ガイ「・・・なぜ、そんなことをしないといけないのだ？！」

サキ「それは、アクセス数が4000件も超えたというのに、評価・コメントが1件もないからですよ。」

ガイ「俺は関係ない！」

サキ「怒りますよ、ガイ様！あなたみたいな傲慢で、セクハラな人間がいるから、評価・コメントが来ないんですよ。」

ガイ「作者が悪い！」

サキ「それもそうですね・・・って、ただでさえ出番がないのに作者怒らせてどうするの？」

ガイ「すまん・・・」

サキ「それでは、本編始まります。誤字脱字・意味不明な点があると思いますけど、許してあげて下さい。」（ペコッ）

ガイ「宜しく頼む」（大右手を挙げる）

第1章：10節 狂気（Innocent）

10、狂気（Innocent）

威圧的な扉に手をかける。

どうやらロックが外れているようだ。

そもそもなんで、俺は閉じ込められにやらなんのだ。

俺は、何か悪いことをしたか？

アイちゃん、すまん。俺は逃げるぞ。

扉を、開く・・・

・・・

・・・

どっちに行けばいい？

右を見ても左をみても、T字の突き当たり。

まったく同じに見える・・・

どっちに行っても、外にたどり着けるっていう、都合のいい話ではなさそうだ。

そもそも、俺の都合が、運がよければ、記憶喪失にも、わけのわからん所に閉じ込められてるってこともないだろう。

・・・それにしても、警報がうるさい。

“レベル5”って、なんだよ。レベル100になったらどうなるんだ？

「うーん」・・・わからん。右？それとも左？

それよりも、ブリーフ一丁って言うのもなく。

・・・

パンッ

右から火薬のはじける音がした

何やってんだ？あいつら？？

右のT字にはしゃがみこんだ、研究服を着込んだ男女が両手を挙げている。

俺には、気づいてないみたいだし、進む方向は左に決定！見つかったら、なんか連れ戻されそうだしな。

左のT字の突き当りまで小走りでかける・・・

パンッ

また、音がした。振り返ると、恐らくだが、一人は倒れ、一人は腰をおとしたまま後ずさりをしている。そこに、黒ずくめが数人あらわれた。

何がおきてるんだ？？

パパパパパッ パパパパパッ パパパパパッ パッ

火薬の乾いた音が響く。

パパパパパッ パパパパパッ パパパパパッ パッ

警報の次は、花火かよ。なんか、よくわかんないし、何がしたいのかよくわからんから、さっさと進もう・・・でも、さっきまで通路の奥は白かったのに、今は・・・なんで赤いんだ・・・うっ

黒ずくめが2人、こっちに走って来るのが見えた。

体が動かない。体が震えてる・・・

俺も殺されるのかな？やっぱ、記憶はなくても未練はあるから、死にたくないよな。

目を閉じると、アイの顔が鮮明に浮かぶ。

パンっ パンっ

あれどうなったんだ？ ゆっくりと目を開くと、黒ずくめ達は額を打ち抜かれ、

ドサツ・・・ ドサツ・・・

と倒れこんだ。

その遠く後ろからは、黒い塊が押し寄せてくるが見えた。

パパパパパッ パパパパパッ

とにかく俺は走った。

本当によくわからん。あいつら、頭を打ちぬかれて死んだんだよな。誰が殺した？ 俺以外誰もいなかったよな。自殺したのか？！ なぜ、俺の前まで来て自殺する必要がある？

パパパパパッ パパパパパッ

「おいっ、撃つなよ！！！！ 当たったらどうする！！！！ 話せばわかる！！！！！！」

ひたすら、走った・・・

・・・なぜか、恐怖はなかった。
・・・なぜか、死ぬ気がしなかった。

通路の先に、赤い髪をした白衣を着た女性？を見つけた。
後ろには、もう誰もいない。

赤い髪の女性が部屋に入って行く。

なぜかその部屋に入らなければならぬ気がした。
逆に、入らない方がいい気もした。

この矛盾が、俺の葛藤?!

このささいな選択の積み重ねが運命??

第1章：10節 狂気（Innocent）（後書き）

次回『従順』…素直に従う様。

「その行為が何を引き起こすかよりも、従うことが重要」BYレイコ

「狂気とは、本人にとっては普通のこともある。」

BYO2

最後までお読み頂きありがとうございます。

誤字脱字の指摘、コメントを頂ければなお幸いです。

申し訳ありません、ラブコメあり、ロボットあり、と書いたのですが、もう少し先になりそうです。末永くお付き合い頂ければ幸いです。

「失敗は許されない!!!」by ガイ
「所詮は作者の自己満足」by ユウキ

第1章：1.1節 従順 (A believer or the faithful)

誤字脱字・意味不明なことがあると思いますがご了承ください。読んで頂けると幸いです。

当初の予定より配信が遅れましたことを心よりお詫びします。

第1章..11節 従順(A believer or the faithful)

11、従順(A believer or the faithful)

「アルファ―B分隊配置完了いたしました」
僕は報告をあげた。

第1目標、O2ならびにワイザードシステム。

第2目標、人工進化研究所の制圧、データ。

アルファ―B分隊構成

隊長..コウヘイ・クジヨウ修道士

以下隊員 信者五名(軍事教練未修得)

万全を期すために、ゴ―グルで確認する。

もう4度目だ・・・

僕は認められなければならない・・・

認められること、認識されることで、人は人間になれる・・・

もう無視されるのはイヤだ。

“隊長..コウヘイ・クジヨウ修道士”分隊構成履歴には隊長名
だけが載る・・・うれしかった、

“僕はここにいる”

それが、その文字の羅列が意味を成す。

その文字のためだけのために、軍事教練も1年受け、
修道士に成りえた。

《全部隊配置完了いたしました》

《繰り返し言うが、失敗はされない。

各員、目標を制圧せよ!!!》

「アルファ―B分隊了解しました。」

報告の際、姓名を名乗ることは許されない。

「アルファ―B分隊突入！」

「「「「「・・・・・・」」」」」

返事は返ってこない。あたりまえだ。

司教様に作戦行動中は口を開くなど言われているからだ。かつての僕がそうだったように、“享受された世界”を彷徨ってる・・・いや、安住している。

我が隊は中枢部を目指す

・・・

・・・

一応、慎重に進むが特に問題はなさそうだ。

まあ、何かあっても信者たちが盾になってくれるだろう。

人が人を殺すことは平時・平和な時は悪だ。罰せられる。

人が人を殺すことは有事・戦争の時は正だ。表彰される。

僕の“主義”は神側につけば、正になる。“弱肉強食”

神の使者が人類を滅亡することが正ならば、その尖兵と

なることは、救われるということ、僕も根っからの信者だ。

通路を進みながら、ゴースルの隅で点滅する新着データを開く。

「重要破棄人物 レイコ・ラングラ―」

レイコ・ラングラ―どつかで聞いたことあるよな。

あつ、そうか軍事学校のとときのクラスメイトのレイコ君・・・
同姓同名だよな?! やっぱり・・・

Need to Know 必要なきに必要な情報をしれ
ばいい。

逆に必要でない情報は知りえない・・・それは本人が決める
ことではなく、上が必要かどうかを判断する。

グーグルについているカメラもしくはレーダーが、対象者を捕ら
えたときのみ、写真が送られてくる。

レイコ君のおかげで僕は、周りに認識される存在になった。

レイコ君、修道士になってから、何してるんだろうな。

もうあれから1年か。

・・・
・・・
・・・

ビービービー

《警報・レベル5が発令されました。非戦闘員ならびに
研究関係者はすみやかに退避してください。繰り返します、
警報・・・》

突如、鳴り響く警告音。

もう気づかれたのか・・・

正面から、研究員らしき男女が走ってくる。
銃に手をかける。

「なにかあったんですか？」女が話かけてくる。

「・・・」

こいつらバカか？主義者のことは一部の人間しか、知らない

とは言え、レベル5の時に、知らない人に声をかけるなんて常識外れもいいとこだ。

「皆さん、銃をお持ちということは、やはり侵入者が・・・」男は話が終わりに近づくとともに、顔色が肌色から紫へ変化かしていた。

今頃気づいても遅い、これが人間に対して平和ボケした人間の末路・・・ロクなもんじゃないな。

「構えろ・・・」信者たちは構える、バラバラに、

僕は女の右の太ももに、白いスカート越しに狙いをつける

パンっ

火薬のはじける音がした

「・・・」

女は尻餅をついた。ショックのあまり声が出ないようだ。

白が赤に染まる・・・

僕が起こした行為によって世界が認識し、結果が生まれる。

“僕はここにいる”ということが確定する瞬間。

男もしゃがみこみ、両手を挙げる。

「やめて下さい。許して下さい。やめて・・・」

女は何度も何度も泣きながら、懇願する。

涙、鼻水、よだれ、なりふり構わず・・・願う。

「女、口をあけろ、そうすればお前だけは助けてやる。」

パンっ

男は声にならない声を出しながら腰を後ずさりする。

「撃て」僕は命令を下す、

信者達は、その男に肉薄し、

パパパパパッ　パパパパパッ　パパパパパッ　パッ

火薬の乾いた音が響く。肉片が飛び散る。

パパパパパッ　パパパパパッ　パパパパパッ　パッ

さっきまでの白い通路は、赤く染まる・・・僕が染めた・・・
ピイツ　ゴ―グルから発信音がする。

《262度24メートル、第一目標発見》

左を向くとブリーフの男が見えた。

人差し指と中指を立て、ブリーフの男を指差す。

信者が2人、ブリーフ男に走って行き、

肉薄すると銃を構え、ブリーフ男に向かって撃つ。

パンっ　パンっ

ドサッ・・・　ドサッ・・・

と倒れこんだ。

やられた、どうして?!

即座に僕は、親指と薬指と小指を胸の前で円を描き、
ブリーフ男に向かって行った。

三人の信者が前に、盾になりながら自動小銃で
ブリーフ男に発砲する。

パパパパパッ　　パパパパパッ

1枚、2枚盾が打ち抜かれる。ナゼダ???!!
僕も撃つ。

パパパパパッ　　パパパパパッ

体に痛みが走った・・・

ブリーフ男を追おうとしたが、最後の盾も使い物にならなくなった。

ドサッ

どうして?撃った弾が反射して返ってくる??!

僕は霞む天井を見上げながら思う。

なぜ、拒否される。僕は世界に認識されないのか・・・

・・・

・・・

・・・

一つ一つは致命傷でないにしても、これだけ、血を流すと

・・・さすがに・・・

“誰か僕を認めて、認識して下さい”・・・

ピイツ　　ゴークルから発信音がする。

《17度96メートル、重要破棄人物　レイコ・ラングラ》

「うっ」僕は声を上げる・・・

ゴークルには対象者の写真が映されいた。

・
・
・僕の愛しのレイコ君、初めて僕を認めてくれた人・
・

第1章：1.1節 従順 (A believer or the faithful)

次回『使命』…自らが為すこと。成さなければならないこと。

「僕はここにいる」 B y クジ ヨウ

「従わなければ、規律が乱れる。」 B y アイ

最後までお読み頂きありがとうございます。

誤字脱字の指摘、コメントを頂ければなお幸いです。

申し訳ありません、ラブコメあり、ロボットあり、と書いたのですが、もう少し先になりそうです。末永くお付き合い頂ければ幸いです。

「失敗は許されない!!!」 b y ガイ

「所詮は作者の自己満足」 b y ユウキ

第1章：12節 使命 (The life is used) (前書き)

レイコ「配信がたびたび、遅れたことをお詫び申し上げます。」
(ペコりと頭を下げる)

クジヨウ「アイ君、逢いにきたよ。」

レイコ「あんた、誰?! まあいいわ、あなたも一緒に頭を下げなさい。」
(小声で)

クジヨウ「……………」
(ショックのあまり声が出ない)

レイコ「早くしなさいよ。まったくトロいわね」

クジヨウ「……………どうして?」

レイコ「ふがいない作者のためよ……………」
(めんどくさそうに)

クジヨウ「アイ君は、それで僕を認めてくれる?」

レイコ「評価・コメント、心よりお待ちしております。」
(ペコりと頭を下げる)

レイコ「あんたも言うのよ、早く! 私の最後の仕事になるかもしれないんだから……………」

(無理やりクジヨウの頭を抑えつける)

クジヨウ「誤字脱字・意味不明なことがありますと思いますがご了承下

「ゆさ。」

第1章..12節 使命(The life is used)

12、使命(The life is used)

隔壁の閉鎖、O2・ウイザードシステムを守ること。

これが私の為すべき事。そうしなければ、人類は滅ぶ。

なれない銃を構え、扉を自動式の扉を手動で開く・・・

照明が落ち、非常灯が点滅する管理室・・・

「手動で隔壁を閉鎖するわよ!!」ユウキは叫ぶ。

電子制御になった昨今では珍しいアナログな鍵を胸元から取り出す。A A施設において、非常時の際、何らかの原因で、隔壁が閉まらなかったとき、唯一、手動制御できる油圧式の12連隔壁を閉じることの出来る鍵。

本来の役割を果たすことは、かつてなく、責任者が“お守り”代わりに身につけている物である。

「そのあなた、扉を閉めておいて頂戴。早く。」

外に迫る気配を感じ、少しでも時間を稼ごうと・・・

だが、目の前のツインテールの少女は後ずさり始めた。

「ユウキ教授殿!! いったい何が起きているのですか?」
ユウキに気づき、近づいてくるアイ。

「司教様、“天使の涙”お借りします。」

何か、つぶやきが聞こえた……

“天使の涙”主義者どもが使う、オーバードライブの種。

まさか・
・
・

ユウキは奥のアイから手前にいるツインテールの少女に視界を合わせる。

ツインテールの少女は、

まるで、ビー玉のような丸い玉を指先から喉の奥に向かって落とした。

ゴク
つ
・
・
・

. . . ! ! ! ? ? ?

まずい、この子がスパイ・・・手引きしたものがいることは
予期してたのに・・・最悪だわ・・・

ユウキは体を硬直させた。

“Over Drive”（オーバードライブ）体内に薬物とナノマシンを投与することにより、交感神経を切り、人体の限界以上の力を引き出す。約5分間は、この世の者とは思えない、速さ、力で相手を駆逐し、腕が吹っ飛ぼうが、足が飛ぼうが戦い続けることができる。人類の狂気もたらした産物。必ず、訪れる死へ加速する、人類にとって個の死を無駄死にしないための兵器。

だけど、これには最大の欠点がある。発動に時間がかかる上に、理性がなくなる。動くものを狙い、かつ、敵も味方も

判別できなくなる。

これを逆手にとれば、助かる。5・6分じっとしていればいいのよ。自滅しなさい。

アイに、目で合図を送る、が、ユウキが動きを止めたことに違和感を感じ、アイもその場で動きを止めていた。

さすが、出来る子は違うわね・・・

目の前のツインテールの少女の両目の瞳孔は開き、涙を流し、口は半びらきのまま、ヨダレたらし、鼻から鮮血が流れ出始めていた・・・

発動する・・・

・・・！！！！？

ユウキはふと気づく・・・

隔壁の閉鎖、O2・ウィザードシステムを守ること。

これが私の為すべき事。そうしなければ、人類は滅ぶ。

このままじゃ、私とアイは助かるかもしれない。しかし、明日はない・・・！！！！どうにかして隔壁を閉じなければ・・・

発動すれば、管理室の奥にいる研究者達を襲い出すだろう。チャンスはそのときしかないわ・・・仕方がないわ・・・

人類の明日のためだもの・・・

だが、制御室はその奥にある・・・私が行くよりも、アイに行ってもらった方が成功率はあがる・・・少しでも、確率を

あげる、ためには私がおとりになれば・・・犠牲になれば・・・

ユウキの体は、痙攣するかのように、震えだした・・・

ツインテールのバケモノと、瞳孔が開き切った目が合う。

まずいわ、気づかれた・・・そう、私、死ぬのね・・・

バケモノは頭を垂れ、ヨツンバになると、

「ウおおおおお~~~~ン」狼の遠吠えにも似た声を荒げた。

震えはいっそう増す・・・

不審に思った研究者達が3名、駆け寄って来るのが見えた。

「ユウキ教授何かあつ・・・！！？」

ゴリっゴリっゴリっ・・・ぷちッ

一人目の首が飛ぶ、四本の足で飛び上がり肩の上にのると、

両手で首を、頭を引きちぎった・・・

バケモノはツインテールの長い髪を振り乱し

両側の研究者の胸を腕で貫いた・・・

血の雨が降り注ぐなか、ユウコとアイは立ち尽くしていた。

「きゃアアアアアア〜」奥から叫び声が聞こえる・・・

「アイ、このキーで制御室床下のカギを回して頂戴。」

極力、体を動かさず、小声で話す。・・・震えながら

「・・・・・・・・」

「あいつは私が引き付けるから、、」

ガラガラ！！ガシャンー！！！？

再び、奥から音がする。

「キーをあなたに投げるから、受け取ったら走って・・・」

「・・・・・・・・・・了解」アイは呟いた。

ユウキはアイに向かってキーを投げると、単発式の銃を構え直した。

アイが走り出すと同時にユウキもバケモノに向かう。

まだ、死にたくはないわね。昔、先生によく言われたっけ、

“生まれて来るところは選べないが、死に場所は選べる”と。

まあ、一応保険はかけてあるから・・・

でも、最近更新したのっていつだったかしら？！

ユウキ・ギリシマという個はここで終わる・・・間違いなく。

グチャッグチャッグチャッグチャッグチャッグチャッグチャッ

足を動かすたびに音がする。まるで泥沼のような感覚。

単発式の銃で狙いをつけると、発射した。

パッン

何かを食らうバケモノの背中に向かって・・・

「さあ、こっちよ、バケモノ!!」

ユウキは出口向かって走った・・・必死に・・・

グチャッグチャッグチャッグチャッグチャッ　ドチャッ

何かにつまづき前のめりに倒れる・・・

「っう」

胃の中がグルグル回る・・・吐きそう・・・

バケモノはどこにいったの？

顔をあげるがそこにはいない・・・

非常灯のせいなの？手が真っ赤に見える・・・

「ユウキ主任。ダメじゃないですか、私をシンジナイと・・・」

後ろを振り返ると、そこにはツインテールの片方がほどけた少女が立っていた・・・

左手に、ブロンドの髪の毛の生首をぶら下げて・・・

「!!!!!!?・・・アイ!!!!!!?」

第1章：12節 使命 (The life is used) (後書き)

次回『未来』…選択による結果。すべての人、もの、の総意。それが、意識的であれ、

潜在的であれ

「生まれて来るところは選べないが、死に場所は選べる」BY 先生

「先生って誰だよ？」BY クジヨウ

「あなたこそ誰よ？」BY レイコ

「……！！？」BY クジヨウ

最後までお読み頂きありがとうございます。

誤字脱字の指摘、コメントを頂ければなお幸いです。

申し訳ありません、ラブコメあり、ロボットあり、と書いたのですが、もう少し先になりそうです。末永くお付き合い頂ければ幸いです。

第1章：13節 未来(T o b e c o n t i n u e d ?) (前書き)

誤字脱字・意味不明なことがあると思いますがご了承ください。読んで頂けると幸いです。

第1章：13節 未来(T o b e c o n t i n u e d?)

13、未来(T o b e c o n t i n u e d?)

血の雨が降り注ぐなか、ユウコとアイは立ち尽くしていた。

「きゃアアアアア」奥から叫び声が聞こえる・・・

「アイ、このキーで制御室床下のカギを回して頂戴。」

「・・・・・・・・」

あなたを守るために、私は他を犠牲にすることをいとわない。

「あいつは私が引き付けるから、、、」

ガラガラ！！ガシャンー！！！？

再び、奥から音がする。

「キーをあなたに投げるから、受け取ったら走って・・・」

「・・・・・・・・・・了解」アイは呟いた。

私が、あなたを救う・・・

アイはキーを受け取ると、銃を右の懷から抜きし、

制御室に向かって走り出した。

グチャッグチャッグチャッグチャッグチャッグチャッ
足を動かすたびに音がする。

キーをまわせば・・・どうなるの？だけど、ユウキお姉さまが
指示することだから、このキーをまわすことは、あなたを

救うことになるはず・・・

ユウキお姉さま、すみません。私は・・・彼を守りたい・・・

制御室の扉の前に、バケモノがいた・・・

銃を構える。両手でしつかりと・・・

人はここまで変われるものなの・・・？！

・・・！！！！！！？

ツインテールのバケモノは、肉塊に顔をうずめ、

まるで、子供がおもちゃを散らかすように、ハラワタを引きずりだしていた・・・

こみ上げる感情を抑えるより、吐き気を抑えるほうが困難・・・

アイ、落ち着くのよ。あいつはまだ、気づいていない。

ユウキお姉さまが、背後から引きつけてくれる。

チャンスは1度きり・・・1回もあるのよ、アイ。

感情はコントロールできている。何度も訓練、投与したから。

パッン

「さあ、こっちよ、バケモノ！！」

奥から、ユウキの裏返った声が聞こえた。

バケモノがユウキのいるほうを振り返った。

今しかない・・・

アイは、バケモノの後ろを横切ると、制御室の扉に手をかけた。

・・・!!??

明らかに、背中に気配を感じる。

早すぎた・・・バケモノに気づかれた・・・

後ろから、アイの首に、熱い、ベトベトした、小さな手がかけられる。

「っう」 体が動かない・・・

「シンジてくれた・・・ユルシテアゲル・・・」
すっと、手は闇に消えた・・・

全身が脈うっている・・・

制御室の扉をあけ、中に入る・・・

「うおえー」アイは、腹の底から、吐いた・・・

何も考えられない・・・気持ち悪い・・・
キーをまわさなければ・・・

床下を開き、真一文字の鍵穴にキーを差込む

ガコッ

その重い鍵を、力いっぱいまわした。

これで、あなたを救える・・・O2、あなたを・・・!!????
私の名前は、アイ・ルイス、じゃ、あなたの名前は、O2。違う。

それは検体の名前。わたしの愛する人・私を愛でてくれた人。

少尉殿・・・！！？ 違う！！これは、役職、名前じゃない・・・

こんなにもはっきり、あなたの顔は浮かぶのに、名前がわからない。どうして、私も記憶喪失・・・違う！！

軍隊にいたときの記憶はあるし、お父さんも、お母さんの顔も浮かぶ・・・

あなたに初めて抱かれた晩のことも・・・でも、私の記憶はそう言うが、

証明できない。記憶とはあいまいで、かつ、実際にあったかどうかは怪しい。

もしかして、私の記憶自体つくられたもの？！

・・・わからない・・・恐らく混乱してるのね・・・先のこと、彼のこと、今の状況からして・・・

私の為すべきことは、O2、私の愛する人を助けること。

今、行くわ。たとえば、どんな犠牲を払おうとも・・・

お姉さま・・・ありがとう・・・

《ピッ》 《ピッ》 《ピッ》 《ピッ》 《ピッ》

コンソールパネルから、音がする・・・

なにかしら・・・

《施設自爆まで4分59秒21》

「何よ！これ！？」

もしかして、レイコが仕掛けていた本当の狙いはこれ・・・！？

第1章：13節 未来 (To be continued?) (後書き)

次回『序章』…始まりがあれば、終わりがある。

終わりがあれば、始まりがある。

「記憶はあいまいなもの」 B y アイ

「？」 B y O 2

「観測者・第三者がいて、初めて、確定する」 B y

ユウキ

「？」 B y O 2

最後までお読み頂きありがとうございます。

誤字脱字の指摘、コメントを頂ければなお幸いです。

申し訳ありません、ラブコメあり、ロボットあり、と書いたのですが、もう少し先になりそうです。末永くお付き合い頂ければ幸いです。

第1章：終節 序章（End to start）（前書き）

あとがきに、第1章の本質^{テーマ}があります。ご覧下さい。

誤字脱字・意味不明なことがあると思いますがご了承下さい。読んで頂けると幸いです。

第1章：終節 序章（End to start）

14、序章（End to start）

来た通路とは反対側に向かって歩く。

くそっ、何がどうなってんだよ。

結局、部屋には入らなかった。

というよりも、入れなかった。

なんか、女の叫び声は聞こえるし・・・

アイちゃん、どこに行ったのかなぁ。

腹減ったな。

また、殺されるのかなぁ。

また?! あれ、俺、殺されたことあったっけ？

殺されたら、ここにはいないよな。

通路のかどを曲がる・・・

「いたぞ!!」 遠くから叫ぶ声がした。

また、来たよ。なんか面倒だな。

叫んだら逃げてくれって言ってるようなものなのに・・・

黒い塊が近づいてくる・・・

もう、なんか疲れた・・・

死ぬのも悪くないかも・・・記憶もないし・・・

ガコッガコッガコッガコッガコッガコッガコッガコッガコッガコ

ツガコツガコツ

遠くから、視界が短くなつて来る。

「あつ、潰されちゃった」

目の前、鼻の先は隔壁で閉ざされてしまった。

隔壁に向かって

「うおおおお」雄たけびを上げる。

「何がどうなつてんだよ！誰か説明してくれよ！！」

アイちゃん！！！！」

なんでこうも簡単に人が死ぬんだよ！！

そう、ここは地獄だ・・・そうに違いない・・・

今まで相当悪いことをしてきたんだな俺。

隔壁に背を向け、再び、フラフラと歩き出す・・・

やっぱり、さっきの部屋に入らないといけないのかあ

赤い髪の女性が入っていった部屋の入り口には、元来た通路から何かを引きずったであろう血の跡が、中に続いていた。

なんだよ。また、誰か死んでるのか？

口の中が、胃液ですっぱくなるのを感じながら、部屋の前に立つ。

ズルッ

足を一歩中に踏み入れた瞬間、滑る床に足をとられ、前のめりに倒れた。

ベチャッ

ヌルヌルする気持ち悪い。鉄の臭い？血のニオイ？！

「あつ、どうもすいません」
差し伸べられた手をとる・・・

!!!!!!?

強くひっぱった手は、見事に二の腕より先がなかった・・・

「うおえっ」気分が悪い、クラクラする。

「・・・・・・・・君」

近くで男の声がする・・・

誰か生きてる・・・

おもむろに立ち上がり、声のする方に近づいて行く。

「レイコ君、逢いにきたよ。レイコ君、逢いにきたよ。」

黒髪の少女を抱いた、男が座り込んでいた。

その横には、

恐らく入り口で見かけた、赤髪の女性が死んでいた。

「うおえっ」気分が悪い、クラクラする。

なにがなんだかさっぱり、体も血でベトベトなのか、
自分の嘔吐でベトベトなのかさえわからない・・・

「これは一体何が起きてるんですか。助けて下さい。」
少女を抱く男に語りかける・・・

「レイコ君、逢いにきたよ。レイコ君、逢いにきたよ。」

少女の頭をなでる彼は、まったくこちらに気づかないようだ。

べちゃっべちゃっ

奥から、足音が聞こえて来る。

良かったまだ生きている人がいる。

べちゃっべちゃっ

視界には、ブロンドの髪を一つに束ね、銀縁のメガネをかけた少女が現れた。

「アイちゃん!!」

「会いたかった。最後に会えて。」アイは安堵の声をあげる。

が、目つきは鋭くなり、先の少女とそれを抱く男に銃口を向けた。

「レイコ君、逢いにきたよ。レイコ君、逢いにきたよ。」

同じことを繰り返し繰り返す彼は、それでも、意に介さなかった。

「アイちゃん、助けてよ、もうイヤだよ。」俺は懇願した。

アイは、天使のような笑みをこぼし答える。

「……ごめんなさい、もう助からないわ。」

「えっ、なんで!? なんで助からないの? 俺も助けてよ。」

「もう手遅れなのよ。みんな助からない。私もあなただけは助けたい……」

「じゃ、助けてよ。ねえ、助けてってば」

「ごめんなさい……」

アイは俺に抱きつくと、口づけを交わして来た。

地獄で天国を味わうとはこういうことを言うのだろうか?

『自らが変われば、世界は変わる』

夢で聞こえた声が再び、こだまする。

アイは、爪を立て強く抱きしめる・・・
俺も、アイを抱きしめる・・・

『あなたには、その力がある・・・』

アイは舌を入れてきた・・・

俺は・・・

『選択の時は、今。』

他人に願うことではなく、あなたがどうしたいのか。』

アイの唇を離すと、

「俺は生きる・・・そして、アイと添い遂げる・・・」

「ありがとう・・・気持ちだけで十分よ。」

「ただし、助かったら、続きをさせてくれよ」

「いいわよ、でもあと数秒しかないわ・・・」

アイは再び口づけをした・・・

目の前が、閃光に包まれた・・・

第1章：終節 序章（End to start）（後書き）

次回 第2章

配信予定10月4日

「自らが変われば、世界は変わる」

「自らの考え方が変われば、世界観は変わる」

「世界は個の総意によって成り立っている。
個が変わらなければ世界は変わらない」

最後までお読み頂きありがとうございます。

誤字脱字の指摘、コメントを頂ければなお幸いです。

申し訳ありません、ラブコメあり、ロボットあり、と書いたのですが、第2章ではそれなりに
書けそうです。

第2章：1節 邂逅（Encounters）（前書き）

第2章は第1章から約1年後のお話です。

神の使者は、地球人類の約半分を滅ぼすにいたり、その行いは殺戮というより捕食行動に近く、どこから来たのか、どういう生態をもっているかは未だ謎である。しかしながら、人類の科学の進歩は目まぐるしく、反重力物質の発明により人型機動兵器・戦術弾の実用化、それらによりグランドゲートの封鎖に至る。

人類の生存の執念により、均衡が保たれていた。

主義者達は表舞台に立つことはなく暗躍は続いている・・・

第2章：1節 邂逅（Encounters）

照りつける太陽、茹で上がる砂地、蒸しかえるコックピット

「あっち、このままだと戦う前に死んじゃうよ」

網膜投影式のレンズから眺める砂漠の地平線にゆらゆらと蜃気楼が
浮かぶ

「剣^{ツルギ}うるさい」甲高い少女の声が耳の付け根の骨伝道マイクから流
れてくるとともに、

左上にポップウインドウが立ち上がりその声の持ち主である茶髪の
小柄な少女が詰め寄ってくる。

「仕方ないだろ、暑いんだから・・・クーラーくらいつけてもいい
よね、というか今何度だ??」

歩行の振動が微弱ながら伝う、シートを背に静感式のパネルを操作
する。

「やめなさいよ、改めて数値で言われるとさらに暑くなるわよ。」
頭を垂れ、ウインドウに移りきらない長い髪を振り乱しながら少女
は言い放った。

直後、目の前に＜外気温52度…内気温35度＞と表記される。

「口に出したら、使者の前にぶっ殺すわよ!」ギロッと上目遣いで、

髪の暖簾からこちらを睨みを利かせている。

「・・・・・・・・60度」ヒタヒタと滴り落ちる汗をぬぐいながら答えた。

「・・・・・・・・茶色い髪に隠されたなで肩が、ぴくつと動いたかと思うとピタッと止まってしまった。

「おい、直ちゃん？！もしかして怒ってる？？」

水素から変換した電力を動力に回しているため、エネルギー節約のためそもそもクーラーはついていない・・・

「・・・・・・・・ふっふっふっ」不敵な笑みをこぼすナオの声が伝わってくる　これがいわゆる悪寒？！

「只今、体感温度マイナス値です・・・ごめんなさい、許して？！」

「許さない・・・」

「ナオちゃん、お願い・・・ナオ様ごめんなさい」

「絶対に・・・許さない！！！！ツルギ覚悟しなさいよ！！！！」

警告音とともに右半身に微弱な電流が流れロックオンされたことを伝える。

視界情報で危険を伝えるとどうしても反応までにタイムラグが生じるため、

反射を用いている。そこにAIが介入し回避行動をとる。

プログラム

被弾確率は格段に下がるが・・・

「・・・うわっ」時すでに遅し、左に飛びのいた際、砂地での蓄積データが搭乗機体にまだないため、砂に足をとられ

視界が傾く・・・その直後背中に強い衝撃が走る・・・

「イッてゝ、何するんだよ」視界を上げると50mほど先に120mmライフルを構えた人型戦闘機動兵器、第二世代後期型マルスが飛び込んできた。

「あんたが悪いんだからね。この下手くそ。」

「この近距離でライフルを向けられ緊急回避プログラムが働けば誰だってひっくりかえるわ」

「あのゝお願いですから、ツルギ君もナオちゃんも訓練していただけませんか。」やさしい女性の声が耳元でささやく。

青いナオのマルス機とちょうど中間前方に視界を移すと36mmマシンガンを装備した白いマルスが映り込んだ。

「お願いします。お願いします。お願いします。」立ち上がったウインドウでは黒髪の20代前半の女性がペコペコ頭をさげている。

「^{ハルカ}遙隊長ゝ、ナオは悪くないですよ、ツルギが文句ばかり言って、さらに下手くそだから・・・」

「なんだよ、俺のせいだよ！文句は言ったけど、下手くそじゃないぞ！』『リカバー』」

音声コマンド＋自動制御で姿勢を立てなそうとするが、左右の手足が砂にとられ立ち上がれない。

制御機器で唯一アナログなダイアルのつまみを一番右のオートから真ん中のセミオートを通り過ぎ左のマニユアルまで回す。

「そもそもクーラーが付いていないのが悪い！」

「暑さくらい我慢しなさいよ、あんた男でしょ！！！」今にも長い茶色い髪を伝って滴り落ちそうなくらい汗をかいた少女が答える。

「お願いですから、二人ともケンカしないで下さい。」うるうるした瞳を浮かべ厚い唇がへの字に曲げたハルカのウインドウが最大値まで強制的に拡大される。

「すみません、隊長すぐに立てなおしますんで。」

右足のペダルを踏み込み、左手のハンドルを引き込む。手足に砂のような感触を感じながら姿勢制御していく。

マニユアルに設定すると機体を感じとる感覚をフェイタルスーツにより搭乗者にフィードバックする。

とはいっても、あくまでも感覚を再現してるだけなので基本痛覚感覚機能はオフされている。

ある程度立ち上げが完了したところでセミオートに戻し、立ち上が

った時点でオートに戻す。

「早くしなさいよ!! こんな暑いところもう居たくない・・・さっさと索敵訓練終わらせて帰るわよ!!」

「ほんとナオはうるさいな〜! そもそもお前がイラついてロックオンしなければ・・・」

「お前らしい加減にしないかー!!」ハルカ機の対角に視界を移すと両肩に4連式のロケットランチャーを担いだ青いマルスが映り込んだ。

「オープン回線でケンカしやがつて、黙って聞いているこっちの身にもなりやがれ、そもそも砂漠は暑いんだから

そんなことくらいでケンカするな。他の隊が聞いてたらどうするだ! この恥さらし目!!」

癖のある白髪を後ろで束ね、無精ヒゲをはやした20代後半の男のウインドウが立ち上がる。

「おっさん、うるさい!!! 基地局通してのフルオープンじゃないんだから、誰にも聞かれてないわよ!!」

「なんだと、このくそガキ!! ケツもまだ青いくせに大人に口答えするんじゃない!!!」

「あつ、言ったわね、それセクハラだよ、それに大人気ない、おっさん」

「なんだとー!!!!!!」

「まあまあ、二人とも・・・落ち着いて・・・」

「ツルギは黙ってろ!!!!!!」

ふとウィンドウに目を落とすと最小表示になっているハルカ隊長が汗とも涙とも見分けがつかない光るものを瞳から流していた。

「うつ、うつ、うつ、うつ、うつ」どうもナオと遼^{リョウ}のおっさんは気づいてないみたいだな。

タッチパネルをいじり各機に最大ウィンドウ、最大ボリューム（骨伝導＋スピーカー）でつと・・・

「うつ、うつ、うつ、うわぁくん、うわぁくん」ハルカ隊長の年に似合わない大泣きがコックピット内に鳴り響く・・・

ナオとリョウは鳩が豆鉄砲くらったような顔し、お互い見合わせ・・・

「「どうもすいませんでした!!」」

これでなんとかおさまったか・・・ハルカ隊長はまだ大泣き中・・・

二人がウィンドウ越しに目で訴えてくる。

「どうもすいませんでした!! 今後はこのようなことがないように気をつけます!!!!!!」

直後、ピタッと泣き声がやみ、

「ツルギ君よろしい、ナオちゃんもリョウ先輩も仲良くしてくれま
すよね?!」

「「もちろんです!!」」

やられた・・・

第2章：1節 邂逅（Encounters）（後書き）

次回：世界（World of life） 環境が変わっても人は人間として生きていく。

「清く、正しく、可愛いく」BYナオ
「強く、正しく、カッコよく」BYリョウ
「旨く、正しく、美しく」BYハルカ
「・・・・・・・・・・・・・・・・」BYツルギ

第2章：2節 世界(World of life)前編(前書き)

通常の世界感とは違いますので、軍事・科学等に相違がありますので承ください。

索敵訓練を終え、基地に帰還したハルカ小隊、中間試験項目ということもあり、ハルカは単身、司令に報告に赴く。

第2章：2節 世界(World of life) 前編

「第07機動戦闘部隊 教育隊所属 遥^{ハルカ}小隊 1200時 第1
3工程索敵訓練をおえ、帰還しました。」

つぶらな瞳に赤渕のメガネをかけ、黒の制服に身を包んだハルカは、乾いた厚い唇を開き申し訳なさそうに報告を上げる。

その眼前には、恰幅のいい40代前半の少し頭の薄い男が、重役椅子に深く腰掛けていた。

「……………1200時ねえ?!」

やさしい口調に嫌味をこめた言い方をし、目の前の木製の机に手をかけゆっくりと立ち上がった。

「……………」ハルカは押し黙ったまま、毛の長い赤絨毯を見つめてる。

「本来の作戦であれば、懲罰ものだな……」

男は手を後ろで組み、窓の方に振り返った。

「申し訳ありません、司令」

「まあ、君たちは相当な問題児らしいじゃないか?!^{アカツキ} 暁教官の報告は聞いているよ。それよりも、今日は小隊長面談の意味も含めているのはもちろん知っているね?」

「ハイ、存じ上げております。」

短めのスカートの裾とニーハイソックスの間にある白いふとももの前で手をもじもじさせながらハルカは答えた。

「では、何か私に言っておきたいことはあるかね?!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はい、精一杯頑張ります!!」

はつきりと、精一杯の声を絞り出すが、もともと声が細いハルカの声は8畳ほどの部屋でも響くことはなく、相変わらず赤絨毯を見つめていた。

男はふうとため息も漏らし、基地を見渡せる200インチ液晶でできた窓をじっとにらみ

右手をあてスライドさせると映像は消え、部屋も薄暗くなった。

「小隊中間試験、小隊長適正面談の結果は追って連絡する。以上!」

「了解しました、・・・・・・・・では、失礼します・・・」

黒いパンプスを履いた足で踵を返すとドアの方に歩いていった。

ハルカの白い細い手がドアノブにかかった、時、男が音もなく背後から近づき黒髪がかかった耳元でつぶやいた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

《グラン基地内第4ハンガー》

「ハルカ隊長大丈夫かな？」

紺のフェイタルスーツに身を包んだツルギが青いマルスの足先に腰をかけ、コックピットを見上げ問いかけた。

ひょこつと顔を出した茶髪のアオが答える。

「大丈夫なわけないでしょ。間違いなく今回はヤバイわよ。」

「作戦時間を丸1日オーバーしたから？」

ハイハイと言ったような顔し、アオはコックピット内に顔を引っ込めた。

「あんた本気で言ってるの?? それだけじゃないでしょ？」

「そういえば、3回全滅、丸1週間の任務で補給は受けても1回だけなのに2回も受けたから?!」

「そうよ、中間試験でこんな結果で怒られないわけがないでしょ?」

「でも、シュミレーション実施のときは10回くらい全滅したし、基地まで帰れたことないよ、僕ら。」

「ほんとにバカね、他の部隊は補給なし、約6日で帰還してるのよ」

「だって、模擬敵は実践配備前の第三世代機、しかも、乗ってるのは現役バリバリの士官クラスだぜ、そら勝てるわけないよ」

「あんた、一回死んだほうがいいんじゃない？相手はローカルネットも、高性能レーダーも切ってるのよ、見つからないように索敵するのが今回の任務でしょ」

「じゃなんで僕らだけみつかったのかな？」

「ほんといいかげんにしてよね、あんたのせいでしょ、オープンチャンネルじゃべるわ、勝手にマニュアル操作に切り替えてマニュアルレーターに砂を詰まらせて、動けなくするわ・・・」

「でも、その後補給用の発炎筒を指定の場所以外で打ち上げたナオが悪いんじゃないの？」

「うつ・・・うるさいわね、あれはちよつとした勘違い・・・そもそもあんたがね」

「・・・あつ」

ツルギの視界に砂煙をあげ第三世代機が通り過ぎる。

流線型のか細い黒染めの機体は明らかに、第二世代マルス機に比べると頼りなくみえるが、反重力物質の搭載により浮遊機動を可能にしただけではく、地球の重力との反発作用を用いることにより自らエネルギーを発生、逐電し、放電させることで得られる電磁フィールド（バリア）を発生させることができる。そのため、マルス機

のような重い装甲を取り付ける必要もなく生産コストも安価で、機動性の高い機体となっている。

「かつこいいよな、あの第三世代機、ダークナイトだっけ?!」

「ツルギ、さぼってないで、さっさと洗浄すませちゃってよ。まだ、おっさんの機体もやらないといけないんだから」

「はいはい、わかりましたよ、ナオお嬢様、あっそういえばリョウ先輩は?」

「えー、指数係数はこのままで、たぶん大丈夫、OSの更新は終わったから・・・次からは砂地でもひっくり返ることはないわね♪」

ツルギのコックピットでぶつぶつとつぶやきながらパネルをてきぱきと操作するナオ。

「ナオー、聞ってる?」マルス機の右足首の洗浄する噴射機のスイツチを切り、再び見上げ声をあげるツルギ。

ひょっこと茶髪の少女は顔を出し、

「何か言った?」

「リョウ先輩知らない?」

「ハルカ隊長の白いマルスの所にいるでしょ?」

「いないよ、またサボりかな・・・、それよりもナオ、どうしてそんなにニヤニヤしてるの?変だよ?!」

少女は顔を赤らめ、コックピットに引っ込んだ。

「知らないわよ!! あんたバカじゃない!!!!」

第2章：2節 世界(World of life)前編(後書き)

次回：第2章3節 世界(World of life) 後編
「世の理に順ずるものが正しいとはかぎらない」BYリョウ

第2章：3節 世界(World of life) 後編(前書き)

通常の世界感とは違いますので、軍事・科学等に相違がありますのでご了承ください。

第2章：3節 世界（World of life）後編

<ブリーフィングルーム A-03>

「それでは只今より講義を開始する、中間試験の発表は最後とする。」

壇上にあがった身長180CMはあろうかという女性が声高らかに語り始めた。

Aルームは30名ほどが座ることのできるブリーフィングルームだが、席はまばらに空いている。

「前回の復習として、まず、我が人類のおかれてる状況を説明せよ」

釣り上がった眼光が獲物を探す。

「ナオ、答えてみろ」

「・・・・・・・・」

「どうした、早く答えんか?!?!」

「わかりません」

どうもナオは暗記科目は苦手らしい。それをあえて当てる暁教官^{アカツキ}つてS?!!

「バカ者!?!!では・・・部下の責任をとって、ハルカ、答えてみ

ろ!!!」

「はい」自信満々で勢いよく立ち上がろうとしたとき、例のごとく椅子に備え付けの膝をぶつけたがいつもどおり気にせず答えた。

「2015年グランドゲートが突如、太平洋南岸に隆起、出現し、そこから後に神の使者と呼ばれる生物が大量発生。

それらは、知的生命体である我が人類に対し敵対意思をむき出しに襲ってきました。科学を持つ人類にとってそれは

当初脅威ではなく掃討できるレベルでしたが、2018年先進国の資本主義の荒廃、発展途上国の軍国主義の台頭に

より戦線は瓦解し、ゲートから溢れ出る使者が人類の生命活動圏へ侵食した結果、

2022年、総人口は半数以下の20億人まで減少しました。

事態を重くみた各国は国際連合から連邦へ移行し、世界統一国家を形成、

翌2023年、限定核兵器の一斉使用によりグランドゲートの一時的な封鎖に至りました。

現在2030年まで大規模な使者の進行はありませんが、核の使用による地軸のずれにより、

温暖化はいつそうに進み異常気象も多発しています。以上が前回の要約です。」

” さすがはハルカ隊長、講義だけは強い。実践は相変わらずだけど。”

と一番後ろの5列目、右端2番目にすわるツルギは思った。

そんな彼の右隣にすわるリョウが小声で話しかける。

「大女狐に睨まれると石になるんだって。」いつものくだらない冗談を言ってくる。

講義初日に、気の良いツルギが信じてしまい、いつもリョウがからかって遊んでいたからである。それ以来、^{アカツキ}暁教官は通称キツネとなったことはいうまでもない。

「うむ、宜しい。」

目の前のハルカが席につく。

「諸君らも知っての通り、使者を退けなければ我々人類に未来はない。科学者たちの見解によれば、

グランドゲートは一種のワームホールであり、そこから溢れ出てきた生物、いや、怪物達は地球外生命体とされている。

一時的な封鎖とはそのワームホールに繋がる入り口を核で物理的に塞ぐとともに、放射能汚染により死の大地に

変えたことにより進行を防いではいるが、いつ突破されるかわからないうえに、いつ第2のグランドゲートが

出現するかわからない。貴様たちのすべきことは、一刻も早く、技術、知識、を身につけ立派な防人となることである！！」

”防人^{サキモリ}って守る人ってことだよな、そうすると退けたことにならないんじゃないかな”とふとツルギは思った。

淡々、粛々と進むキツネの講義は決して楽しいものではないが、一同は真剣に聞き入っている。

もちろん、知らなければいけないことだからということもあるが、中間試験以降は、

それよりもこの部屋にいる20名5小隊がそのままアカツキ教官を隊長とする戦闘機動中隊として機能するからである。

また、20名中男性は5名しかおらず、モデルのような体型、気の強さからアカツキに憧れをいだく女性もすくなくない。

男性遺伝子であるY染色体の劣化により生まれてくる女性の比率が圧倒的に高まってきているのに加え、

2022年までに死亡したのが防人として戦った男性が多かったため、現状のようになっている。

「以上、これにて本日の講義を終了する。最後に中間試験は合格である。」

誰一人として喜ぶ者はいなかった。通過事例である中間試験合格は、地獄への片道切符と揶揄されることもたびたびある。

「起立！！敬礼！！！！」

アカツキ教官は去り際にこう言い残した。

「小隊得点、個人得点は各員のメールに送付してある。確認してくださいに！！」

この得点により、稀に小隊長の降格はありえるが、それよりも今後の各小隊の役割、兵装が割り当てられることを

重要視している。

・・・・・・・・・・・・・・・・

寮の部屋へ戻り、メールを確認しようと廊下を歩いていると、

「ツルル〜ギ〜君♪」リョウ先輩が見た目に似合わない声を出し、肩を組んでくる。

いやな予感がする。

「なっ、なんですか？」

「ツルギさん、今、二人部屋独りで使ってるんだって♪」

「健^{ケンジ}二先輩が卒業したんで今は独りですけど・・・なんですか？気

持ち悪いしゃべり方しないで下さいよ」

「気持ち悪いって、おじさん傷ついたなく、責任とって?！」

「本当に何ですか？」

リョウは親指で後ろを指差すと、少し離れたところに、同じ中隊の恵子ケイコ小隊長が立っていた。

「部屋貸して、ツルギ君♪」

まさか？

「自分の部屋使えばいいじゃないですか？」

「ダメだ!! 俺の部屋には相方がいる。」

「別にいてもいいでしょ。」

「俺3人でってのは趣味じゃないのよ。恥ずかしいし・・・」

「・・・・・・・・・・・・何をするつもりですか？」

「エッチなこと」顔を赤らめるツルギ。

「絶対にイヤです。」

「なあ、お願い。こないだ調べてほしいことがあるって言ってですよ。それ調べといたから。」

「それは、リヨウ先輩のマルスの調整との交換条件じゃないですか。」

「あつ、そうか、じゃ、あのこと、ナオっちとハルカちゃんにいつちやおうかなー？」

「ずるいですよ、脅迫だなんて。」

「部屋貸してくれなかったら、口滑らすかも・・・」

リヨウは組んだ肩をはずすときに、ツルギの右胸ポケットからルムキーを抜き取り、

「ツルギ君、やっぱり君はいいやつだよ、1時間散歩してきて♪」

右手に持ったカードキーをケイコにチラつかせると一緒に寮の方に走って行ってしまった。

「部屋、汚さないで下さいよ～～～凹」

・・・・・・・・・・・・・・・・最悪だ

第2章：3節 世界（World of life）後編（後書き）

次回：第2章：4節 意志（Will）

第2章：4節 意志（Will）（前書き）

□ ■ 機体DATA ■ □

第二世代機後期型マルス

型式番号…XZ-216

全高…18.1m

本体重量…42.7t

装備重量…換装型のためポジションによる。

ジェネレーター出力…1420kw

装甲材質…チタン合金セラミック複合材

（一部ナノチューブ繊維配合）

第2章…4節 意志(Will)

「いやあゝ!!!! 何なのよゝ、こいつらゝ!!!!」

ナオのマルス機は、ライフルを逆に持ち、まるで餌に群がる蟻のような形態をした全高約1m全長約2mの黒い物体達に振り回していた。

「ナオゝ、何やってるんだよ!!!! 狙撃手が突撃手より突っ込むなんて無茶しすぎだよ!!!!」

後方600mにいるツルギが叫ぶ。

本来、後衛のミサイルランチャー等を装備した支援手が面制圧を

行った後、スナイパーが中衛より援護しつつ、前衛の大剣を装備したバンガードと

マシンガン等を装備した攻撃手が殲滅、もしくは突破口をつくるのだが……

ギリギリとナオ機に詰め寄る十数匹の通称アントと呼ばれる神の使者。

戦闘能力はカーボンナノチューブを織り込んだマルス機の超合金装甲をモノともしない強靱な顎だけだが、

常に数百匹単位で行動し、時には万に近い軍団を形成し襲ってくる。物量に包囲されなければ、容易く殲滅できる部類である。

「ツルギ何とかしなさいよー！」

リョウ機のミサイルランチャーとポジトロンバズーカの一斉射撃により数千のアント軍団は半数以下に減らし後、

ナオが「お手本を見せてあげる♪♪」とライフルをマシンガンのように乱射しながら突っ込み孤立。

ライフルの銃身の上部部がヒートサーベル加工されているので逆手に変えることによりある程度の敵の掃討できるが、

相次ぐ各小隊の出撃回数が増え、整備が万全とまでは言える状態ではなかったため、

弾切れになったナオ機は、本来の性能を出せず現状、死地にもっとも近い最悪の状態に陥っていた。

「何とかしなさいって言っても・・・」

バスタードを振り回し、救出の突破口を開こうとするが、一撃で大型種に致命傷を与えられる、

バイブレーション
共鳴振動を備えた振り上げられた刀身が空を切り、地の砂煙を巻き上げる。

ジリジリとナオ機に詰め寄るアントの1匹が左足後方に取り付く。

「もう、あっちに行きなさいよー!!!!」

まるで狂乱したかのようにライフルの柄を振りますが、死角のアントには届かない。

装甲がかじりとられる、鈍い振動がコックピットに、ナオに伝わってくる・・・

「早く!! 早く! はやく・・・助けて・・・」ナオは懇願する。

「くそ!!!! リョウ先輩!!!! 隊長!!!!!! ハルカ隊長~~~~!!
!!!!!! 何とか何とかしてください~~~~!!!!!!」

ツルギがさほど広くないコックピット内で反響するほどの絶叫をあげるが・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

領域MAPに目を落とす、先ほどまで友軍機を示す緑色のポイントが2つあった場所は1面、赤色に変わっていた。

アントは地中にトンネルを掘り、移動する性質を持っているため地盤の質によっては後方から突如出現し

包囲されてしまう。敵を示す赤のポイントが数百が集まり赤に染めていたのである。

また、1匹黒く醜悪な生物がナオ機に取り付く・・・

「いや！いや！！死ぬのはイヤ！！！！ツルギ助けて・・・」

装甲に備え付けの対人、対小型種用の近接防御兵器を打ち上げる。

ソフトボール大の3つの塊は地上から30mほどの高さで飛散し、

黒い生物達に突き刺さり白い液体を撒き散らす。

「ナオ待ってろよ、今助けに行く！！！！」

やっこの思いで数匹のアントを片付け、セミオートからマニュアルに切り替え、残り少ない推進剤で

ナオ機に向かってフルブーストする。

前方に向けられたまるで槍のようなバスタードと、加速する頑丈な装甲により、アントは次々に白い液体とともに吹き飛ぶ。

体の彼方此方に、危険信号を表す電流が流れ、ネット付く液体の感触が伝わる。

「ナオ！ナオ！！！！」

「ツルギ！ツルギ！！！！ツルギ！！！！！！！！！！」

視界に入ったナオ機には馬乗りになるかのように数匹のアントが覆い被さっていた。

「この醜い輩ども、僕の、俺のナオから離れろ～～～～！！！！！！」

近接防御兵器を打ち上げるとともに、バスタードの外装ブレードをパージする。

左右に飛んだ外装は、砂煙ともにアント達を巻き込み爆散、

太く長い大剣は細く長い刀に変わり、横から斬りつけると前方の3匹のアントは上下に真っ二つ割れた。

「はぁ、はぁ、ナオ大丈夫か？？！」

「あんた、遅いのよ、バカ・・・」ウインドウに移しだされた髪の毛長い茶髪の小柄な少女は涙ながら答えた。

「よかった。本当に良かった・・・、まだ動きそうか？！」

ナオは、震える手でパネルを操作し各部の被害状況を確認する。

「・・・・・・・・ダメね、まあ生きてるだけ良しとしましょう♪」引きつつ笑顔をナオは強がって見せる。

「こっちは、機動にはさほど問題ないけど、推進剤は尽きちゃったし、武器も刀しか残ってないや。」

刀は敏捷性が高く、切れ味も抜群で高い攻撃力をもつが、刀身が大剣に比べ、いうまでもなく薄く耐久性に優れない。

あくまでも、緊急用の物なのでいつ折れてもおかしくない。

「じゃ、私のナイト様、この地獄から連れ出して。」涙目のナオは、両手で自らの両足を抱くような姿勢で答えた。

ツルギのマルスはナオ機のコックピットに手を伸ばす……

その刹那……ツルギの背中に悪寒、醜悪な触覚、電流を感じるともに、

装甲が食い破られる振動と死への恐怖が伝わってきた。

「ごめん、ナオ」

第2章：4節 意志 (Will) (後書き)

次回：第2章5節 意図 (just as one intend
ed)

第2章：5節 意図(just as one intended)(前書き)

誤字脱字、矛盾がありますがご了承ください。

第2章：5節 意図(just as one intended)

×××実機シュミレーター終了×××

×××2021年7月6日グラン基地防衛戦×××

×××小隊撃墜数6502体、アント殲滅率38%×××

×××パターンF（限定条件 武器損傷率 高 援軍なし 弾薬MAX）×××

×××クリアランクE（小隊 マルス機4機全壊 小隊員4名死亡
グラン基地壊滅）×××

ツルギの目の前に、テロップが流れる。

「はあ、はあ、なんだこれ??！」

頭が混乱して事態がつかめない。

シュミレーターは、より実践に近い形で訓練を行えるよう基地のスーパーコンピューターが過去の

実践記録から仮想の電子空間を作り上げる。また、その情報を搭乗者の網膜投影式の視界に送り込むとともに

フェイタルスーツに、コックピット内に現象を^{ゲンシヨウ}フィードバックする。

近年に至っては、感情移入（移行）システムの確立により、シュミ

レーターに入る前の状況が整理、改変され、

あたかも現実のように搭乗者に感じさせる。

「生きてる・・・そうか、訓練か、訓練で良かった」ツルギは胸をなでおろし、一息つくと

コックピットの開閉スイッチを押す。

さまざまな色のLEDランプが灯る薄暗い閉鎖空間に前方から光が差し込む。

まるで倉庫のように高い天井には煌々と照らす白熱灯が整然とならんでいた。

あたりは、ツルギと同じように訓練中であろう、マルス機のコックピットを模した四角い箱が

いくつも、油圧ピストンに揺られてる。

「ツルギー！」声のするほうを向くと、少女が長い髪をなびかせ勢いよく飛びついてきた。

赤いフェイタルスーツに身を包んだナオは抱きついたまま、半べそをかいているようだ。

「ナオ、大丈夫?!」

「大丈夫じゃないわよ、本当に死んだかと思ったわ!」

ツルギは胸に顔をギュッと押し当ててくる少女に対し、どこに手を当てていいか解らず空をさまよう。

「ほっ、本当だね、・・・シュミレーターってここまでリアルなんだね」

「バカ、ばか、馬鹿、実践であんな無茶したら承知しないからね！」

「・・・いや、ナオが、助けてって・・・」

「・・・」両肩がピツくと動く。

「・・・」

「・・・いつまでくっついてるの！離れなさいよ！！」

抱きついていた手を離すとツルギを突き放した。

「・・・いや、ナオが・・・」

「なによ、さっさとブリーフィングルームに行くわよ！！！！」

突如、踵を返し、通路進み始める。

項垂れながら、ツルギはつぶやく。

「何が何だかさっぱりわけがわからない・・・」

「男のくせにぶつぶつ言っていないで、早く来なさいよ！」

こちらに振り返ったナオの顔は、涙のせいなのだろうか赤らんでいた。

くくブリーフィングルームA-03>>

「あっはあっはあっはあっ」リョウが腹を抱えて爆笑していた。抱腹絶倒とはまさにこのことを言うのだろう。

「私のナイト様、この地獄から私を連れ出して♪♪♪」

「うっさいわね、おっさん!! そんなこと言ってないわよ!!」

「はいはい、おっ丁度いいところにナイト様のご到着だ、ほらナオ姫。」

遅れて入ってきたツルギをみたナオはうつむいたまま黙ってしまった。

その後、アカツキ教官からの説明で、今回の訓練はツルギとナオの装備の適正または連携を見るためのものだったらしく、

ハルカ隊長とリョウは感情移行システムはオンにしておらず、あえて撃墜されたことがわかった。

二人の必死な恋愛劇が、冷静そのもののリョウのつぼにはまったこととはいうまでもなく、

ハルカ隊長にも、「いいな〜♪私も誰か助けに来てくれないかな♪」といわれる始末。

結局の所、ツルギ、ナオ両名はポジションによる戦闘規則を守っていないことに加え、

訓練詳細を前もって知っていたとはいえ、戦闘指揮を最低限ださなかったハルカ、

面制圧の際、故意に敵を討ちもらしたりヨウの両名も責任を問われ、

明日よりの2日間の休暇取り消し、追加実施訓練が言い渡された。

<<司令室>>

「アカツキ入ります!!」

本造を模した扉を2回ノックし、中に入りキビキビとした敬礼を行った。

「ご苦労、ではさっそくだが報告を聞こう。」 恰幅のいい男は深く椅子に腰を下ろしたまま答えた。

各中隊の取りまとめ役でもある彼女は訓練の進行具合、基地の備蓄率、各隊からの上申書を読み上げる。

「プロジェクト・グリフォンは順調かね?!」

「・・・特に問題はありません。」

「特に・・・ねえ。」男は、嫌味ばく言葉を返した。

「装備、弾薬、改装、修理の上申書に関してはすべて通していい、休暇、シフト、配給に関してはすべて却下だ。」

「了解しました。報告は以上です。」

「ときに、娘は元気か?!」

「はっ、ハルカお嬢様は日々訓練に励んでおられ、お元気であります。」恐縮するアカツキ。

「で、」男は言葉を返す。

「はっ、司令のお言葉通り休暇を取り消し、グリフォン・シナリオ25特殊訓練を行います。」

ですが、優秀なお嬢様一人だけでは取り消しは難しかったため、ハルカ小隊を訓練に参加させます。」

「・・・まあいいだろう。計画には問題ない。下がってよい。」

「はっ、失礼します。」

アカツキが退室した後、薄暗い部屋で男はつぶやいた。

「キツネもなかなか、食えない奴だな・・・そろそろ尻尾をだすだろう・・・」

第2章：5節 意図 (just as one intended) (後書き)

次回：2章6節 勇気 (Who dares wins)

第2章：6節 勇氣(Who dares wins)前編(前書き)

□ ■ 機体DATA ■ □

第三世代機ダークナイト

型式番号：CA-132

全高：16.2m

本体重量：28.9t

装備重量：腕部・脚部兵装換装型。

ジェネレーター出力：2400kw

装甲材質：ナノチューブ繊維配合強化セラミック

第2章：6節 勇気(Who dares wins) 前編

□ ■ ライオンシステム起動率28% ■ □

「ガイ様、起動チェック完了しました。」

複座式のコックピットの後方から透き通った声の女性がマリンプルの長い髪をかき上げ、報告を上げる。

「遅い、もたもたするな!!! サキ!!!! 発進!!!!」

前方の操縦席にすわるガイと呼ばれた男は、左右に付いたコントロール桿を、成人男性の1.5倍はあろうかという大きな手で力いっぱい握り、押し込む。

.....

「申し訳ございません、起動はまだです。」

「なんだと、サキ! 早くしろ!!!! 起動完了したと言ったではないか!?!」

□ ■ ライオンシステム起動率42% ■ □

システム・兵器管制等を行う後方に座るサキの目の前には起動率が表示されている。

「ガイ様、私はチェックが完了したと申し上げただけで・・・」

「ええい、言い訳は聞きたくない!!俺が早くしろと言ったら早くするんだ!」

「・・・・・・・・」

「・・・あとどのくらいだ?」

「・・・・・・・・3分ほどです」

「・・・・・・・・もしかして怒ってるのか?サキ?!」

「ハイ」

ガイはおもむろに自分の後頭部あたりに伸びているサキのモデルのように細い足首を操縦桿のかわりにつかむ。

□■ライオンシステム起動率65%■□

「怒ってないよな、サキ?」

両手に力を込める。

「うつ、お、怒ってます・・・・・・・・まだ」

さらに、力をこめる、骨の軋む音が聞こえるかというほど・・・

「うくうつ・・・・・・・・ガイ様、・・・・・・・・もつとツヨク・・・」

その瞬間、二人の目の前にポップウインドウが立ち上がり、

「おいおい、またやってるのかよ、ガイ」

「おう、なんだ、タシロ」

「なんだじゃないだろ、奴ら行っちゃまうぞ。早く出撃しろよ」

広域マップに目を落とすと、砂漠の溪谷を抜けようとする、5機のマルス機の敵の識別信号をあらわす、赤のポインタが移動しているのを見て取れた。

□ ■ ライオンシステム起動率79% ■ □

「タシロ様、申し訳ありません。1分20秒後には発艦できます。」

「こいつにはもう、様は付けなくていいぞ、サキ」

「・・・了解しました。」困った顔を一つせずに答えるサキ。

「おいおい、ガイ、ついこないだ四司教になったばかりだろ。偉くなったものだね。」

それに僕が君のために特製のダークナイトも持ち出してあげたのに。」

「これはこれは、タシロ司教様、アリガトウゴザイマス」ガイは大きな右手を挙げる。

「よくも人はここまで変われるものだね、感心するよ。」

「俺はもう大司教にしか敬語を使わなくて済む。だからさっきの礼

は特別だ。感謝しろ!!」

□■ライオンシステム起動率95%■□

「もう、いいよ、ガイ司教、僕達は先に仕掛けてる。くれぐれも、白のマルス機は破壊するなよ。スポンサーに怒られるからな。」

「わかった。ミスはしない。」

「お前にとってのミスは心配してない、白はダメだからな。わざと殺るなよ。生け捕りだからな。」

サキちゃん、熱血出世バカを頼んだよ。」

「了解しました。タシロ様。」

<<通信終了>>>メッセージとともに

□■ライオンシステム起動率100%■□の文字が表れる。

「ガイ様、いつでもいけます。」

操縦桿に持ちかえ、力いっぱい押し込む。

「アルキメデス、発進!!!」

「ハイ、ガイ様♪」サキは自らの白い足首についた真っ赤な大きな手形に目を向けうれしそうに答えた。

発進ショックエンスが鳴り響く中、第三世代機ダークナイトより一回り大きい流線型の機体は浮遊し、発射される。

第2章…6節 勇気(Who dares wins)前編(後書き)

□■機体DATA■□

第三世代機アルキメデス

型式番号…CA-175

全高…20.2m

本体重量…32.9t

装備重量…腕部・脚部兵装換装型。

ジェネレーター出力…3600kw

装甲材質…ナノチューブ繊維配合強化セラミック

次回…2章7節 勇気(Who dares wins)中編

第2章：7節 勇氣(Who dares wins) 中編

「ハルカさん、聞いてます？ 僕の話？」

高速で過ぎ去る両端の渴いた岸壁に、目配せしながら、くくプライベート>>の文字が上部に点灯しているポップウインドウに映るハルカに目を落とす。

「あつ、ごめんなさい。ツルギ君・・・でなんだっけ？」

「なんか変ですよ、今日の訓練。」

「そう？ 射爆場の谷をぐるっと一周してるだけでしょ。推進剤を使った高速移動、左右の壁面にぶつかなければ問題ないわよ」

横幅20 m、深さ50 mは有ろうかという、砂漠の谷。通称万華鏡。左右の壁面はレーザー兵器の試射を幾度も行ってきたため、

熱融解により、結晶化、ガラスの線が谷の上部から斜めに幾重にも伸びている。

谷底からの光景は太陽光を反射するキラキラと輝く線により、幻想的な万華鏡の様相を映し出すのである。

「一周するだけなら問題ないんですが、やっぱりなんかおかしいですよ。」

前方を砂煙を巻き上げながら巡航飛行する、白いマルス機に目を

やる。巧みに左右の両足の大腿部以下に取り付けられた、

推進装置を操りながら、所々、左右に緩やかなカーブを描く谷底を
行く。

その前には青いマルス・リョウ機・ゆらゆらとゆれる2機の間からは
赤いマルス・アカツキ機が薄らと見て取れる。バックミラーモニタ
ーには、

ツルギ機とハルカ機の3倍の距離をとった青いマルス・ナオ機が追
従して来ている。

「考えすぎじゃない?!というか、ナオちゃんのが聞きたい
から、通信してきたんでしょ♪」

「いや、そんなつもりは・・・」

実際問題、ナオのことは色々気になることはあるが、この通信はそ
んなつもりはなかった。

本来、小隊単位で訓練を行い、検証し、改善する。異例はあるが4
機編隊を基本とした小隊編成に中隊長である、

アカツキ教官が加わっていること。理由としてはレーダー機能を使
うと、事前にAIが演算し、最適なルートを

示しほとんど自動運行に近い状態になってしまい、訓練にならない
ということで、レーダー機能の第1種ロックがかけられ、

アカツキ教官の後を視認で追従し、推進剤をいかに節約し、早く回れるかというブリーフィングを受けた。

「好きなんでしょ♪ナオちゃんのこと・・・良いな～恋愛って♪」

「何言ってるんですか・・・そんなわけないじゃないですか。」

ナオの笑っている顔、ナオの泣いている顔、ナオの怒っている顔、ナオの喜んでいる顔、アルバムを開くかのように目に浮かぶ

「動揺しちゃって・・・好きなら好きってちゃんと言いなさいよ。言いたい時に言わないと、後悔するわよ。」

「・・・っ、・・・ハルカさんは後悔したことがあります?」

「うーん、まだ、後悔はしてないけど、このままだったら後悔するかな?！」

「それって、ハルカさんも今好きな人がいるってことですよね。」

「ハルカさんも、ってことはツルギ君も好きな人がいるってことだよね～♪」

「揚げ足とらないで下さいよ。ハルカさん。」

「じゃ、こうしよう♪ツルギ君が言ったら私も言うわ。」

「えっ、どうしてそうなるんですか?！」

「隊長命令♪決定事項です。作戦決行時は、2200時というところで♪」

「わかりました。」

何故、このとき冗談半分のハルカさんの言葉を聞き入れたのか、恐らくあと一歩一押し of 勇気が欲しかったからだと思う。

「えっ、言うの？誰に」

鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしたハルカは、明らかに赤面していた。

「僕が言ったら、言ってくださいね、後悔しないようにね♪」

「・・・うん、私も頑張るね♪じゃ、2200時に待ってるね。」

「わかりました。じゃまた今晚。」

<<通信終了>>の文字が浮かびあがる。

また、今晚・・・って、今日言うのか昨日からのあの気まずい雰囲気 of ナオに・・・

・・・待ってるって、誰がハルカさん・・・ナオのこと好き、違えます・・・

・・・僕が言ったら言って・・・すごい嫌な予感が・・・イヤではないが・・・

推進剤が切れた、どうして、常にメーターはチェックしていた。

推進剤のメーターに目を落とすと、約3分の1は残っている。故障か・・・と思ったその瞬間

<<<ロックされました>>>AI制御アシスト機能が働く。左右の足に電流が走る。

「えっ、ということ。」ハルカが呟く。

<<<ロックされました>>>AI制御アシスト機能が働く。右肩に電流が走る。

頭部左右前後についたサブカメラが崖の上にいる十数機の黒い影を捉える。

<<<ロックされました>>>AI制御アシスト機能が働く。左肩に電流が走る。

「やられた、先回りされた・・・」アカツキが嘆く

ズームされた黒い影は姿をあらわにする。ダークナイト・・・

<<<ロックされました>>>AI制御アシスト機能が働く。胸に電流が走る。

「先回り、ロックって」ツルギは・・・

<<<ロックされました>>>AI制御アシスト機能が働く。後頭部に電流が走る。

恐る恐るバックミラーモニターに目を移と、

青いマルス機のライフルの銃口が眼前に写りこんだ。

「えっ・・・」

耳の後ろにつけた骨伝導スピーカーから、冷たくオモイ声が響く

「・・・ごめんね・・・ツルギ、好きだったんだ・・・私」

「ごめんねって・・・」

××××××××DOWN××××××キラキラと輝く万華鏡の中で銃
声が鳴り響き続けた。

第2章：7節 勇氣(Who dares wins) 中編(後書き)

次回：第2章：8節 勇氣(Who dares wins) 後編

第2章：8節 勇氣(Who dares wins) 後編

「ここは・・・」

・・・白く見知らぬ低い天井には2筋のLEDランプが灯っていた。清潔に保たれたベットから右手を空に向かってかざしてみると、点滴の管が二の腕から伸びているのが見てとれた。

「生きてるのか・・・」

ベットに横たわったツルギは、確かめるようにかざした右手を開いたり閉じたりしてみる。

「一応ね・・・」

天井を見上げた顔を幼い声のする方に向けると、赤い腰まである髪を携えた少女が立っていた。

「お嬢ちゃんが助けてくれたの？」

「何にも覚えてないの？あなた」

明らかに10歳前後にしか見えない赤髪の少女は、まるでマントのように羽織った白衣に両手を突っ込み顔を背けた。

「ありがとう・・・僕はツルギ・・・お嬢ちゃんは？」

「お礼を言われる筋合いはないわよ・・・それにお嬢ちゃんじゃないわよ・・・ユウコ」

「ごめん、子供扱いして、大人の人連れてきてくれるかな？色々、聞きたいことがあるから」

「必要ないわ、私が答えてあげる。ここは戦略的母艦スペリオルの医務室よ。」

「スペリオル・・・」

戦術母艦ガンダールが主に配備されているグラン基地において、戦略母艦が配備されたという情報はなかった。

それに、戦略母艦はザガしか聞いたことがない。そんなことよりも、

「ナオは？？みんなは？無事だね？！」

「みんな？？ああ、リョウ達のことね。生きてるわよ。元々何人いたかは報告は受けてないから、何人死んだかも知らないけど・・・」

不意に身を起こし、立ち上がろうとすると、両足に激痛が走った。

「うっ・・・」

「動かないで、あとでゆっくり状況は説明してあげるから、今は安静にしてなさい。」

身を起こして、自分の体に目が行く。白いシーフをかけられた、胸、腹、局部、太もも・・・そこから先がマジックで消されたかの

ように、

ふくらみがなくなっていた。

「えっ・・・足が・・・アシが・・・僕の足がああゝゝ!!!!」

「うるさいわね、足がなくても今の時代死にはしないわよ。命があっただけありがたくなさい。」

少女は長い赤髪をなびかせ、白衣に突っ込んだ左手を挙げると、ハイハイ、と言った具合に手を振り、部屋から出て行った。

「アシ、アシ、アシ、・・・・僕、僕、僕、・・・・」

止め処なく出てくる涙は、足を失ったショックよりも、ナオのことを思う気持ちが強くなってくるものの方がおおきかった。

||||||||||||||||||||||||||||||||

<頭部大破>

<第1メインカメラ破損><胸部第2メインカメラ切り替え>

<第1第2第3第4サブカメラ破損><第5第6サブカメラ切り替え>

矢継ぎ早に立ち上がるダイアログを目にし混乱がさらに増す・・・

地面を捉えているのだろうか、完全にコックピット内は

計器のLEDランプの明かりのみが照らされ不気味な雰囲気をさらに漂わせた。

「ツルギ、お願いだから立たないで。」

音声のみのプライベート通信が切れる。

「なんだよ、ナオどういうことだよ!!! なんとか言えよ!!!」

ツルギの悲痛な叫びに対して＜通信終了＞の文字が点滅で答える。

「どうして、意味わかんねーよ、ナオ・・・」

「生きてるかツルギ・・・」リョウの声が響いた瞬間

爆発の衝撃が機体を襲う・・・どうやら一斉に攻撃を受けているようだ。

「くそっ、逃げきれなかったか、ハルカ機だけでも守るんだ!!!」
アカツキの叫び声とともに

36mmマシンガンの連射音が鳴り響く。

「そんなことわかってるよ!!!」リョウが怒号をあげる。

おそらく肩のロケットランチャーを一斉掃射したのだろうか、爆音とともに土砂が崩れ落ちる地響きが伝ってくる。

・・・ハルカさんだけでも守らないといけない・・・そんなことわかってるよ・・・

僕には何かなんだかわかんないよ・・・

「イヤ、こないで。お願い。イヤ」ハルカは懇願する。

36mmマシンガンの連射音が鳴り響く。

「どうして、効かないの？どうしてダークナイトが襲ってくるの？」

電磁フィールドに阻まれ、全くダメージを与えることができない。

「ツルギ、動けるか、動けるなら援護しろー！！」アカツキの怒鳴り声が悲鳴に変わる。

「きゃあああゝ・・・」耳もとからは轟音、外からは爆音。

「アカツキー！！！！」リョウが叫ぶ。

「ナオちゃんどうしてこんなことするの？お願いもうやめて。」

ライフルの銃声が鳴り響く。2発・3発。ハルカの悲痛とともに・・・。

「っ、ダメか。おい、坊主いつまでも寝てないで起きやがれ！！！！時間を稼いでくれればなんとかなる！！！！！！！！」

「なんともなりませんよ・・・それにナオは、ナオが立つなって・・・リョウさん、すいません。」

「おっ、生きてんじゃないか。すみませんじゃなくて、このままでいいのか。クソっ、もうダメだ。もた・・・」

再び土砂が崩れ落ちる地響きが伝わる。

しばらくすると、何事もなかったかのようにあたりは静まりかえり

＜強制排出＞のダイアログが立ち上がった。

第2章：8節 勇氣(Who dares wins) 後編(後書き)

次回：第2章：9節 闘争(combative spirit)
前編

第2章：9節 闘争（combative spirit）前編

「ツルギ、落ち着いたか？」

医務室の扉が開き、白髪の男性が入ってきた。

「リョウさん、元気そうですね。」

天井の2筋の光を見つめながら答えた。

「すまない、つらい思いをさせてしまつて。」

普段は束ねている白髪の髪を下ろしたリョウの口元から薄らと傷後が見て取れた。

「別にいいんです・・・なにがなんだか・・・」

足元が疼く・・・

「こんなときに本当に申し訳ないんだが、今後の話をしようと思つて。」

「僕には、もう関係ないことですから。どこかの基地でおろして下さい。」

「そうだな、これ以上君を巻き込むわけにはいかないか・・・でも、基地では下ろせない。」

「どうしてリョウさんも僕に意地悪するんですか？」

上から覗き込むようにして話す、リヨウに対して背を向ける。

「いや、そんなつもりは・・・ない。まあこの件に関してはツルギ君が回復してからゆっくり話すよ。」

「・・・・・・・・・・どうでもいいです。」

「まあそういわずに・・・ああそうだ、紹介しよう命の恩人を」

そういわれて、銀色のマルス機が目には浮んだ。銀色というには少しどす黒く、ただレーザー反射幕の塗装前のようにも見えた。

しかしながら、キラキラと輝く万華鏡の光と太陽の光の反射により、まばゆい銀色に輝くマルスを・・・

「はじめまして、アイ・ルイスといいます。」

リヨウの方を振り返ると、

そこには、リヨウより頭一つ分低い、髪を一つに束ねたブロンドの清楚な女性がお堅い軍服に身を包み立っていた。

「・・・ありがとうございます。アイさん。」

本当は、有り難いとは一切思えなかった、あのとき死ねたほうが僕にとっては幸せだったのかもしれないのに。

|||||

＜強制射出＞のダイアログと共にコックピットが開放される。

「出る、このクソ餓鬼。」額から流れ出る汗のような赤い液体で眼前が揺らぐが、拳銃を突きつけられ出るように急かされる。

「タシロ司教殿、もう一人生きてましたがどうしますか？」グラン基地の仕官の軍服着込んだ男が、インカムに向かって話す。

短波無線なのだろうか、途切れることなく返答が帰ってくる。

「とりあえず、連れてこい」

「了解であります」

コックピット外へでると、強い日差しとともに愕然とする光景が目に映りこんだ。

あたりは爆煙がたちこめ、少し遠くにはひれ伏した白いマルス機の周りを取り囲むように、ダークナイトが7機

左の崖の上には1機の黒い影。それは他のものと離れてるとはいえ、一回り大きく見えた。

「歩け！！」両手を上で組まされ、そのハルカ機を取り囲む黒い悪魔の集団に向かって歩く。

視界が徐々に開かれるにしたがって状況が把握できていた。

「ツルギ生きてたのか？」

白いマルス機の眼前でそのまま膝まつかせられると、横には血まみれのアカツキが同じように膝まつかされていた。

「アカツキ教官、これは訓練ですか？」

明らかに訓練には見えないが、気が動転し訓練であって欲しいという気持ちが強く出てしまった。

すこし苦笑したアカツキは訓練だったら良かったな。と言うと隠し持ったナイフで目の前の強屈な男の首元をきりつけると

「ハルカを連れて逃げろ！ツルギ！！」と叫んだ。

うな垂れた顔をあげると、そこには意気消沈しきり内股でヘタと地面に座りこんだ、ハルカがいた。

反抗の銃声とともに2人目、3人目と兵士に飛び掛るアカツキを尻目に、ツルギはやつとの思いでハルカの元に駆け寄る。

「ハルカさん、逃げますよ。ハルカさん?!」

うつろな目に、薄ら笑いすら浮かべ

「ツルギ君、ずっと好きだった、でもナオちゃんばかりかまって。」

ツルギも予定調和にない事態に混乱し我を忘れていたが、ハルカの状態はさらに酷かった。

「何言ってるんですか。そんなことよりも・・・」

×××PAN×××渴いた音がこだまする。

その先を見つめると、腹を押さえうずくまるアカツキの姿が目に入ってきた。

「くぁ、お前らだけは許さない!!!!」

はじめ地上にいた、6人の兵士は3人までに減っていたが、

「このクソ尼!!!!!!!!!!いい加減にしがえれ!!!!!!!!!!!!!!」

アカツキは容赦なく銃弾が浴びせられ、狂ったダンサーのようにも見えた。

1機のダークナイトからレーザーが発射され、爆炎と砂塵とともにアカツキは蒸散した。

「あは♪アカツキ教官、いなくなちゃった。」

まるでショウをみた感想の述べるハルカ。

「当初の目的を忘れるな。エンジェルキーさえ回収すれば、他はようはない。」

そのダークナイトからスピーカーにて声が響く。

「早くその白いフェイタルスーツを着た女をつれて来い。」

ツルギは強く、まるで寂しいときに抱くぬいぐるみのように、ハル

力を強く抱きしめ後ずさる。

第2章：9節 闘争（combative spirit）前編（後書き）

次回：第2章：10節 闘争（combative spirit）
後編

第2章：10節 闘争（combative spirit）後編

「ツルギ、早く下がるんだ!!」

瓦礫の中からリョウの声が轟く。

その声を聞いたツルギは震える手足に激をいれ、ハルカを抱えさきほどの爆撃であいた窪地に飛び込む。

「もたもたするな！早くエンジェルキーを確保しろ!!! 奴らの援軍がくるぞ」

グラン基地の制服を着込んだ大柄な男が叫ぶとともに、手で左右のダークナイトに指示を浴びせる。

砂煙を上げながら高速浮遊移でツルギたちを覆う。

「・・・来るな・・・・・・来ないでよ〜」

半べそをかくツルギに向かってその黒い巨人は手を伸ばす。

その刹那、瓦礫が轟音と共に飛散し、細かく砕けた岩が雨のように降り注ぐ。

「・・・!!? リョウ・・・さん??」

銀の長い髪をなびかせ、両の手を左右に広げ十字架にかけられたかのように、上空に浮遊するリョウがいた。

目は血走り、額には血管が浮き出ており、口元には薄ら笑いを浮かべていた。

その周りは陽炎のように銀のオーラをまとい、

「・・・クロス」

そう口走ると加速し弾丸のようにツルギに手を伸ばしている黒い巨人を貫く、

装甲がひしゃぎ、電流が暴発する音と共に黒炎をあげ、ダークナイトは金属の塊と化す。

銃を構えなおす3人の仕官達が発砲するより前に、リョウのかざした右手から

レーザーにも似た銀の光が無音のまま放たれる。

一瞬遅れて爆風と共にそこにいたであろう3人の人間は消滅していた。

残りのダークナイト機は一斉にリョウであろう男に向かってレーザーを照射する。

左手をかざすと目に見えるほどの蜃気楼のような空間の歪みが顕れ、それらを反射する。

幾度となく、万華鏡は光を反射したのだろうか、無数の光が溪谷を包んだのち

そこにいたのは、銀の炎に包まれたリヨウと後ろに立つ銀のマルス機、窪地でハルカを抱える脅えきつたツルギ、

崖の上のアルキメデスのみであつた。

頭上のアルキメデスからはガイの高笑いが響いてきた。

「これはおもしろい。」

「その声はガイ……………何故……………お前が生きている……………」

「そんなこと言うなよ、相棒。」

「なにが相棒だ！この裏切りものが！！！」

「おいおい、よく言えるな裏切りものはお前だろ。なあ、サキ」

「……くつ、サキもいるのか。」

「元恋人とは話したくないそうだ。論理的にいけば、2対1でやはりお前が裏切りものだ。」

「・・・お前達が間違っている。」

「間違ってるんじゃないさ、創造主に従うのが何故間違いないのだ。人は家畜なのだよ。」

「何が家畜だ……ふぎけるな!!!!!!」お前らは、箱舟に、自分

達が助かりたいだけだろ。」

「おお怖い、ワイザード相手だとこのポンコツではかなわないな」
はき捨てるように言い放つとともに、閃光が放たれる。

その先にはハルカとツルギが籠る塹壕があった。とっさに銀のマルスは機体をずらし

射線軸に飛び込むがすべてを塞ぐことができず砂塵を巻き上げる。

「・・・サキ」

リヨウが呟く頭上にはアルキメデスの姿はすでにそこにはなかった。

第2章：10節 闘争（combative spirit）後編（後書き）

次回：第2章：11節 審理（under examination）
n）前編

第2章：11節 審理（under examination）前編

「そもそもどうして私がこんなことをしなくちゃいけないのだ・・
」

ツルギの太ももの先に取り付けられた義足の調整を行うユウコがぼやく。

「すみません。」申し訳なさそうには答えないツルギ。

「・・・これで終わり」

と言うとともに小さな平手を太もものに甲高い音がするほど振り下ろす。

痛覚をこらえる鳴咽をもらすツルギ。彼の目は涙することはない。

それとは反対の何か意志をひめた輝きがその目には秘められていた。

「あんたもバカね。こんな足付けてどうするのよ。」

その義足は本来医療の擬似生態が覆う生身にかぎりなく近いものではなく

完全に軍用、機械を保護するために黒ずんだ装甲が取り付けられた細く強固なものであった。

「・・・・・・・・」

「まあいいわ。じゃあとは好きにしなさい。こないだはガキみたい
に騒いでたのに」

見た目が10歳くらいの幼女の体で放つその言葉は皮肉以外のもの
ではなかった。

ユウコのオリジナルは30歳過ぎの女性であること。すでにこの世
にいないこと。

最高の天才にして、常識を度外視する彼女は表ざたには決してされ
ていないクローン研究もしていたこと。

クローン研究と言っても、DNAレベルでの生物の複製は20世紀
後半には確立されていたので、

彼女の研究は完全な複製。成人から成人をつくることはできず

成人から同じ遺伝子情報をもった赤ん坊をつくることにとどまる。

そこで彼女は20歳のとき自分のクローンの赤ん坊を作り

本来であれば環境・教育に応じて性格・考え方・知能指数に変化が
あらわれるのだが

そのクローンを8年間完全に隔離、端的に言えば培養して脳の大き
さを成人のものと大差ないほどまで

成長させる。自らの脳内のニューロンネットワークをスーパーコン
ピューターに読み取らせ、

ナノマシンによってそれをクローンに書き込ませるといふ非常識極まりない研究を成功させていた。

その後年1回上書きすること2回、オリジナルは死亡し晴れてオリジナルとなる幼いユウコが

その人であった。

このことは簡単にリヨウ達から聞かされいたのだが、やはりツルギにとっては

目の前の子供に上からものを言われている感覚になれてはいない。

「もうガキじゃない・・・もう逃げない・・・」

「あんた大丈夫?？」

「ナオ、助けに行くからな・・・」ツルギが呟く。

それに対し呆れ顔を浮かべるユウコ

「敵さん助けてどうするのよ。あの子だって好きで司教になったんですよ。」

ツルギを決意させたのは先日、衛星による全ネット配信による”主義者”の放送が初めてなされ

そこに写る、ナオの姿を確認したためであった。

「それに内容は各国への無条件降伏と使者の受け入れよ。どういう意味か解る??」

抵抗せず、怪物たちの餌になれってことよ。」

「・・・話合えば・・・いや騙されているんだ・・・」

「誰に??」

「・・・使者に・・・」

「もういいわ、バカらしい。この世界の真理、主義者、私達のことを教えてあげる

それでも行きたければ行けばいいわ。オリジナルもこんなにおせっかいだったのかしら」

身長には似合わない長い赤い髪をかき上げるユウコ。

第2章：1.1節 審理（under examination）前編（後書

次回：第2章：1.2節 審理（under examination）
n）後編

第2章：終節 審理（under examination）後編

「世界はね、あなたが思っているほどキレイじゃないの・・・
ツルギ」

ユウコは踵を返し、低い天を仰ぎ続ける。

「そもそも人ってどうして、存在してると思う？」

「そんなの解りませんよ。」

「じゃ、どうしてあんたは生きてるの？」

「そんなこと解るわけじゃないですか。解る人なんていませんよ。」

「もし、人がなぜ生きてるか、存在してるかがわかったらあなたは
どうする？」

「わかったらって、、わからないことがわかったことを想像なんて・・・」

「まあいいわ・・・絶望・・・するわね」

「ゼツボウ・・・何が絶望なんですか？」

「人と言う種が生まれた事実、理由、あなたが生きてる理由に絶望するのよ。それでも聞きたいの？」

「ナオを助けるためには、知る必要があるんですよ？それなら僕は、絶望なんてしません。」

「わかったわ。……300人委員会って聞いたことある？」

「いえ、ありません。何ですかそれは？」

「神の使い……私達の祖先よ。」

「祖先??」

「簡単にいうわね。人は地球という農場に飼育されているのよ。」

「??はあ??」

「飛躍しすぎたわね。あなたにもっとわかりやすく説明してあげる。」

動物は何故、この世に存在してると思う？基本的に上位の食料になるため。

虫、植物すべてが理由が役割があって存在している。

これらは食物連鎖と完璧なシステムを作り上げている。この最上位に存在しているのが

私達人間。でも、その上位存在がいるとしたら。

人間は文明レベルがあがると農場を、牧場を持ち食料を確保する。

それと同じ考え方、上位の存在が私達人間を畜生としてか見てない。

300人委員会ってのはアダムとイヴ。始まりの人間が2人とは伝承していない。」

「じゃ、僕達の運命ははじめから決まっているってことですか？」

「まあそういうことになるわね。ツルギ、あなたこの話聞いても驚かないのね。」

「それなりに驚いてますよ。それに実感がわかないし・・・たとえばそれが事実でも

僕はナオに会って伝えないといけないことがありますから・・・」

「はあ、ここまで恋愛バカだと、深刻にこの事実を受け止めてた私の方がバカらしくなるわね。」

「そんなことよりも主義者のことを教えて下さい。」

「はははっ、そんなこと、人類の運命をそんなこと・・・まあいいわ。」

この事実を知った人間は2つに分かれる。神側につき慈悲を請うか、運命を受け入れるか。

前者が主義者達、農場でより優良により沢山飼育、刈り取れるように手を貸す。

その功績で箱舟に乗り、次の300人委員会のメンバー・アダムとイヴになることよ。」

「ナオはその委員会に入りたい？」

「そう考えるのが自然ね、このままいけば入るんじゃないかしら。

だから、残念だけどあなたが行っても邪魔・必要ないのよ助けなんて。」

「そうか・・・そんな理由で・・・そんなくだらない理由に・・・」

「・・・くだらない??」

「くだらない・・・上位存在がお前らは食料だから死ねと、言われて死ねない。」

ナオと添い遂げるまでは・・・それにそんな神ならいない。

俺が殺してやる・・・!!!!」

第2章：終節 審理（under examination）後編（後書き）

第3章：1節 反逆（rebellious person）後編

第3章：1節 在行（dream and wish in actuality

待望？？の第3章・・・

第3章・1節 在行(dream and wish in actuality)

『この世は、我らの主と、そのメシアのものとなった。』

旭^{キヨク}が照らす崩れ去った巨大なビル群の瓦礫、

反響する彼女の声に神々しいさえ感じるツルギ。

だが、こんなことで諦められるはずもない。

ここまでここまで、来たんだ。……………すべてを犠牲にして・

「もうやめるんだ。もう、やめよう……ナオ!!」

足元のドス黒く濁ったコンクリートを眺め、

軋^{きし}む膝^{ひざ}を抑え、擦れかけの喉元から、声を、、願いを搾り出す。

ナオと呼ばれた少女の両の足の間からは、

日の光を浴びる鋭くもあり鈍くもある鋼^{ハガネ}が輝きを放つ。

その光は彼女の背を通り、長い髪をすり抜け天に掲げられたその白い細腕に握られている。

「ツルギのこと、好きだよ……私」

鋼の巨剣に似合うことのない、屈託のない笑顔を浮かべる少女。

「俺もナオのことの・・・大好きなんだ・・・だから・・・」

ツルギは、か細い太刀の柄を握る右の手に力を籠める。

「・・・だから？」先とは一変し冷淡に答える彼女

が、力がうまく伝わらない・・・

「・・・もう・・・」イヤだ・・・

「・・・もう？」

静寂の中に、瓦礫を踏む、華奢な音。幾度となく・・・
時間の感覚がなくなりそうになる。

静寂の中に、重い鉄の塊を引きずる音が近づいてくる。

「わたしのこと、好き・・・なんだよね・・・ツルギ」

柔肌をなでるようなやさしい声で語りかけてくる彼女。

「・・・お願いだから・・・」

地を映す視界に、艶かしい少女の足が入る。

「もう・・・」

「・・・もう？」僕は答える。

「・・・死んで!!」断末魔にも似た彼女の絶叫にハッと顔を上げる。

高らかに掲げられた巨剣が映る。

彼女は下唇をかみ締め、その巨大な塊を振り下ろす。

その泣き顔は、何故か天使の笑みにさえ見えた。

「君になら・・・」いいか。視界が暗闇に包まれる。

瓦礫がひしゃぐ音が荒廃したビル群を劈くつんざ

遠ざかる意識の中に、左の手の感覚だけがやけに鮮明に宿る。

暖かい、、、そう、ポカポカするような暖かさ・・・

懐かしい、、、そう、子供のころ感じた、母の・・・いや、もっと
遠い昔に・・・

ナオの両の手は力なく垂れ下がる。

彼の者を引き裂いた巨剣から・・・

「・・・よかった・・・あなたと・・・いっしょ・・・に・・・いけて・・・」

グロテスクな異形の左手は彼女の中心を貫いて いた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1132f/>

Grand Gate

2010年10月11日05時07分発行